

〔書評〕

John H. Skilton, ed.

THE LAW AND THE PROPHETS

—Old Testament Studies Prepared in Honor of
Oswald Thompson Allis—

Presbyterian and Reformed Pub. Co. 1974, 499
pages.

鍋谷 堯 爾

本書は、もとウエストミンスター旧約教授であったO・T・アリス博士に献呈されたものである。しかし、博士は、本書の完成を見ることなく一九七三年一月二日召天した。享年九三才であるから天寿をまっとうしたと言えよう。本書は、プリンス頓、ウエストミンスター、および、その後の文筆生活を一貫して、福音主義に立つ旧約神学の旗印を掲げつづけた博士の生涯を記念して、教え子や関係者四四名の学術論文及び随想を集録したものである。その中に、福音主義神学会理事である服部嘉明氏の論文も含まれている。

アリス博士は、フィラデルフィアで一八八〇年九月に生れ、ペンシルバニア大学、プリンス頓神学校卒業後、ベルリン大学

で博士号を取得した。その後、一九年間にわたってプリンス頓神学校のセム語教授として教えた。一九二九年、神学論争を機に、メイチェン、ウイルソンなどがプリンス頓を去ってウエストミンスター神学校を創立した時、アリス博士も、行を共にしたのである。一九三六年五六才の時、ウエストミンスター神学校を退職後、文筆生活に専念、九三才になるまで、一貫した福音主義の立場を、著書、論文、雑誌等を通じて発表、その名声は海外にまで広く知られるに至った。おもな著書としては、文書批評説を批判した「モーセ五書」(一九四三年)、デイスベンセーション主義を批判した「預言と教会」(一九四五年)、イザヤ書の統一性を主張した「イザヤの統一性」(一九五〇年)、最大の業績といわれる「旧約聖書—その主張と批判」(一九七二年)などがある。

この献呈論文集に「THE LAW AND THE PROPHETS」(律法と預言者)という題がつけられたのは、一九二五年に同名のパンフレットがアリス博士によって出版されており、そこに、旧約学者の聖書にたいする立場が表明されているからである。すなわち、アリス博士は、旧約聖書の統一性と、旧新約聖書の統一性を支持したが、さらに、旧約聖書は、「律法」が土台となって「預言者」があるという意味での統一性であり、ウエルハウゼンなどの主張するように、その反対ではない。あくまでも「律法と預言者」であって、「預言者と律法」ではない。

四四の論文及び随筆のすべてをここに紹介するのは不可能であるが、内容は五部に分かれている。

第一部 博士の生涯について

五つの随筆による博士の横顔、評価など。

第二部 序論および一般

七つの論文と二つの随筆。

第三部 モーセ五書

九つの論文と一つの随筆。

第四部 士師記から箴言まで

六つの論文と二つの随筆。

第五部 預言書

九つの論文と二つの随筆、及び、アリス博士の葬式におけるヴァン・ティル博士のメッセージ。

論文は計三二であるが、その中で、イザヤ書に関する論文が四つある。

A・A・マックラフ(A・A・MacRae)の「イザヤ六五章一のパウロの用法」は、英語欽定訳の「わたしの名で呼ばれなかった国民に向かって」を支持する論文である。しかし、彼の攻撃する英語改訂訳や、新米国標準訳の採用する「わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって」は、ルターも採用しているところであり、かならずしも自由主義的な心情が働いていると言

いきることはできない。彼の詳細な積義的論理も、説得的であるとはいいがたい。

R・L・アルデン(R・L・Alden)の「イザヤと木」は、イザヤ書全巻にわたって、イザヤが用いた樹木名、木材、地名、植物名、関連動詞「植える」「育てる」など、木の道具などを検討したもので、日本では、中沢「第二イザヤ研究」(山本書店、一九六二年)三一〇～三一五ページに「第二イザヤにおける自然に関する用語一覧」に同様の研究があるが、いずれの場合も、論証の決定打にすることはできない。

J・C・ホワイトコンブ(J・C・Whitcomb)は、「イザヤ預言におけるクロス」においてアリス博士の「イザヤ書の統一性」を紹介し、彼の立場を支持している。イザヤ書の統一性を主張するための最大の難点は、彼より二百年も後のベルシャ王クロスの名が四四章二八と四五章一に用いられていることである。それゆえ、ハリソンなどは、後期の挿入であると考え、アリス博士は、これを四四章二四～二八の文法的分析から説明しようとする。すなわち、二四～二八節は、原文では、全く切れ目のない一続きの文章であるが、それは、三つに大別されている。第一の部分は、さらに三つに分れ、それぞれの節が△造った▽△張り延ばし▽△押し広げた▽という分詞ではじまっている。第二の部分も、更に三つの節が△破り▽△退けて▽△成就させ▽という分詞で始まり、それぞれの節に対応する三つの並行節が△狂わせ▽△愚かにする▽△成し遂げさせる▽という未完

了形の動詞で終る。第三の部分も、更に三つの節が△と言う▽という三つの分詞で始まる。そして、それぞれに対応する三つの並行節は、△復興させる▽△(川々々)から▽△その基が据えられる▽という未完了形の動詞で終る。こうした美しい、三つずつの構文を一連の文章に作り上げていく箇所は、旧約聖書の他の部分には、見当たらない。アリス博士は、この三つの部分が、天地創造にさかのぼる過去、イザヤの生きていた時、そして、イザヤから見た遠い将来に、それぞれ対応しているのであって、第三の部分が、すでに起こっていたり、すぐ起こるような近い時点ではあり得ないと結論する。

以上のアリス博士の論述と、それを支持するホワイトコンプの論文は、今日でも、正統派の「イザヤ書統一性」の有力な根拠となっているが、今日のわれわれは、さらに、「旧約における時」「ことばとしてのし」「預言の本質」などについての考察をすすめる必要をおぼえさせられる。

D・リビングストン(D.Livingston)の「ピアンキの後継者ティルハカ」は、イザヤ三十六章一、二以下、三十七章九の事件の年代を決定するためのひとつの提案である。普通エチオピア系のエジプト第二五王朝に属するティルハカは、ピアンキの後継者であったシャバタカの弟であり、前六九〇年、兄と共に共同摂政になったと考えられている。そうすれば、三十七章九は、前六八八年頃となるが、リビングストンによれば、ティルハカを直接ピアンキの単独の後継者に考えようとする試みであり、三

十七章九が前七〇一年であり得たとするばかりでなく、セナケリブの侵入が前七一五年にありえたかもしれないとも主張する。この点だけみれば、ヤングに近い考えであるが、ヤング自身は、ティルハカなどの年代決定の困難性を告白している。(The Book of Isaiah, Volume II, Erdmanns, 1969, p. 535)。

第二部の序論及び一般では、ヴァン・ティル(Van Til)の「アムステルダム」のUnkehr(転向)がトップにおかれている。「アムステルダムで今日起こっていることは、二〇年代にプリンストンで起こったことに似ている」(三七ページ)。「カイパーとウォーフィールドの時代に、アムステルダムとプリンストンは協力して、改革派信仰の発展と擁護のために戦った。しかし、今は、ネオ・オースドックスの擁護と宣伝のために協力しているようである」(三八ページ)。

二番目の論文は、山内(E.Yamauchi)の「古典および聖書の伝承の諸問題にたいする考古学的確証」であるが、短いけれども、考古学研究の重要性について示唆を与えられる重要な論文である。

フィッシャー(M.C.Fisher)の「旧約理解のためのエチオピア研究からの貢献」は、現在、旧約学では、ラス・シャムラを中心として、北方セム系言語や文化の研究が盛んな今日、もう一度、南方セム系、すなわち、エチオピア語及び文化の地道な研究も重要であることを示唆している。

マルティン(W.J.Martin)の「聖書ヘブル語におけるゼロのプロセス」は、ヘブル語の数概念を扱おうとする野心的な試みであるが、アブローチの仕方や例証が貧弱で成功していない。スキルトンの「今日における英語欽定訳」は、英語欽定訳をもっと用いようという趣旨であるが、三百年以上も前の言語が今日でも通用させうという日本では考えられない状況が、アメリカにはあるということである。「リビング・バイブル」を普及させるのと正反論の論拠もあるということを示している。

ヴァーホフ(P.A.Verhoef)の「十分の一献金—解釈学的考察」は、旧約の律法は、キリストの時代に廃棄せられ、十分の一献金は文字どおり固守すべきではないとの論旨であるが、十分の一献金のみならず、旧約の律法を、新約時代の信仰生活にどのように生かすべきかという問題提起をはらんでいる。

第三の律法に関する部分では、創世記の解釈、グンケルとアルトの立場の批判、ニムロデ、ヤハウエの発音、出二一章六と二二章七、八のエロヒームの用法、バラムの託宣の研究などがありあげられている。

マレー(John Murry)の「人間の起源」は、創世記一章二六、二章六をもとに、人間の創造が、神の独自の構想によるものであることを明らかにし、進化論的発生論を否定している。教理問答のまとめとしては好材料といえる。

ホワイト(William White)の「創世記一章一—二章三に関

する現代の解釈」は、一四の解釈をあげて、今日においても、自然科学とどのように関係づけるかが重要な問題であると述べている。また、どのような解釈を選択するにしても、物語の背後にある歴史性を見る必要を力説する。彼の結論は、「神の言は真理であって、科学の光もそこから引き出される。また、たとえ科学が解きえないことでも、人間の運命を導きつづけるような真理である。」

コップス(L.J.Coppes)は、グンケルの旧約学にたいする重要な貢献を認めながらも、詳細な研究をしてゆくならば、ある点で非常に粗雑であったり、一方的であったり、偏見に満ちた論理によりたのんで、その文学類型批評の原理が導き出されていることを例をあげて説明している。

マッコミスキー(T.E.McComiskey)は、アルトが、神名を基準に、アンフィクチオニー以前の族長たちのパレスチナにおける聖所伝承の存在を考えたのにたいし、族長たちの神名はむしろ、唯一のヤハウエ神の属性を表わしており、伝承分離の基準にならないと主張する。

第四部の士師から箴言の部には、士師二〇章三五のウメアについての考察、サムエル下七章一—五の考察、ダビデの祝福、ヨブのことは霊感、詩四五篇七の解釈、箴言とアメネモブの関係がとりあげられている。

しかし、アリス自身がこの部分を専門としていなかっただけ

に断片的な論文集であるとの感じをまぬがれない。

第五部は、「預言者について」である。

前述のイザヤ書に関する四論文と共に、ヤングの「人の子に
ついてのダニエル」の幻、クラインの「第七週の契約」、アーチ
ャーの「クムラン派文書と比較したダニエルのヘブライ語」、
クレーナーの「マラキの強調点と現代の思想」、服部嘉明「エゼ
キエル二〇章五―二九の積義的研究、エゼキエルの出エジプト
の見解、その神のディレンマ」が含まれている。

ヤング (E.J. Young) の論文は、ダニエル七章一三―一四が
イエスが自分を指して「人の子」と呼んだことの預言であるこ
とを実証した積義的研究である。

アーチャー (G.L. Archer) の論文は、ダニエル書のヘブライ
語とクムラン文書との比較をとおして、この二世紀の文書の用
語、文法などから、ダニエルを同時代の人物とけっして見なす
ことはできないと主張する。

服部氏の論文は、エゼキエル二〇章五―九の文体構造を分析
することにより、神の義と、神の愛の矛盾が、出エジプトと同
じように見られるとの所論である。

紙数を制限された小論文では、十分に意を尽すことができて
いないことはもちろんであるが、全体を見て受ける印象として
は、アリス、ヤングの残した手堅い積義の展開と、改革派神学

を固守しようとする姿勢がどこにも見られることであって、そ
れに、最近の考古学的研究との比較によって新しい道を開こ
うとしていることであろう。その点で、服部氏が、「神の痛み
の神学」などのモティベーションに似ているが、「神のディレ
ンマ」という用語によって、今後、神学的モチーフから新しい
貢献への道を開こうという意欲を見せられたことに感謝した
い。

(神戸ルーテル神学校教授)

J・エレミアス著 田辺明子訳

『イエスの聖餐のことば』

一九七四年 日本基督教団出版局

村 上 久

現代の聖餐研究はH・リーツマンの「ミサと主の晩餐」(Messe
und Herrenwahl) から始まったと言われているが、その研究
史の中で本書(初版一九三五年)は古典的名著として高く評価
されている。エレミアスの特徴はその方法論で徹頭徹尾パレス
チナの諸前提からテキストの解釈を試みていることにある。ギ
リシヤ語の記述をイエスが語られたギリシヤ語に遡らせ、その
際後期ユダヤ教の膨大な資料を駆使し、パレスチナ学の豊富な

知識と相俟って、テキストへの緻密なアプローチをなしてい
る。著者のこの分野における業績と貢献は万人の認めるところ
であって、その特徴が本書のすみずみにまで顕著に見られる。

現代聖餐研究の日本語文献は少なく、その内容も乏しいと言
われている。この意味において本書の翻訳の意義は大きく、待
望久しい書である。訳者が指摘しているように一般の読者にと
っては多少学術的に煩瑣にすぎない点があり、あるとはい
え、省略なしの本格的翻訳が果せたことは高く評価すべきであ
ろう。

本書の巻末に著者の紹介がされておるのでそれを参考にして
著者紹介を簡単にしておこう。ヨアヒム・エレミアスは一九
〇〇年ドレスデンにて牧師の息子として誕生す。父親がドイツ
人教会の牧師としてエルサレムに滞在中(一九一〇―一九一
五)、共に滞在し、後の同地における研究の契機となっていたと
のこと。アラム語の権威者G・ダルマンに師事し彼の研究を継
承している。一九二五年ライプツヒで新約の学位を得、二八
年ベルリン、二九年グライフスヴァルト、三五年ゲッティンゲン
に招聘され以後六八年まで同大学の新約学正教授として貢献
す。その他の日本語訳著書は新教出版社からの「新約聖書の中
心的使信」(一九六六年)と「イエスの譬」(一九六九年)が
ある。

著者は本書の中でイエスの聖餐のことばといくつかの独立し
た伝承の聖餐定型から最古の伝承定型と、その背後にあるアラ

ム語に遡源しうる聖餐のことばを探る。聖餐記事の共通の伝承
の核はイエスの最後の晩餐の時のことばを保存して、本質的
な点において信頼に価するものであることを証示している。

エレミアスの論述の出発点はイエスの最後の晩餐が過越の食

事であったことにある。以下その目次と論旨の展開を紹介して

みる。

第一章 イエスの最後の晩餐は過越の食事であったのだらう

か。

第二章 受難物語の脈絡における、そして独立した伝承とし

ての聖餐記事。

第三章 礼拝が聖餐のテキストの伝承に及ぼした影響。

第四章 イエスの最後の晩餐のテキスト。

第五章 イエスの聖餐のことばの意味。

最後の晩餐が過越の食事か否かの論述に一二二頁をもさいて
いる。共観福音書記者は最後の晩餐が過越の食事と報じ、ニサ
ン十四日から十五日の夜にかけて行なわれたとする。だが第四
福音書の記事によればイエスがピラトの面前で告訴された時に
過越の食事はまだ行なわれておらず、最後の晩餐がニサン十三
日から十四日夜にかけて行なわれたのである。即ち両者の目付
の記述に一日のくい違いがあるのだ。この問題の伝統的な三つ
の解釈を退けると共に前世紀末に提唱されたキドウシの食
事、ハヴェラーの食事、エッセネの聖餐も後期ユダヤ教及びク

ムラン資料の考察に基き否定的に断をくだしている。天文学による年代学からも確実な結論が得られない。著者は専らこの問題の解決がテキストそのものの考察にあるとし、そこに観察しうる過越的性格を有する十四項に及ぶ証拠を掲げている。現代の研究者の多くは(A・J・B・ヒギンズをはじめとし)この結論をその方法論と共に踏襲しているのである。ではヨハネの日付(十八の二十八)はいかに理解されるべきか、著者は予型論がキリスト論として理解された証左とする。

さらに、原始教団に遡源する十四日教徒の古い儀式がパレスチナと小アジアでユダヤ教過越祭とすべく対立していた事実から推して、イエスの最後の晩餐に含まれている過越祭の性格を除こうとした結果と論じている。従って共観福音書の記述の史実性を否定するものではないとする。

この結論に基き過越の食事の枠の中でイエスの最後の晩餐のことば―物断ち宣言、解釈言辭、くり返し命令―の位置づけを試み、過越の儀式の枠にあてはめてはじめて十分に理解できることを強調している。

第二章では主の晩餐の記事が受難物語の枠の中でいかなる位置を占めるのかという文学批評を取り上げる。その際晩餐の記事についての文学批評を下す尺度がマルコとヨハネとの比較にあるとする。結果、マルコの素材がヨハネに再現されている受難記事は古い伝承のまとまりであって、受難記事の形成の過程には長文報告と呼ばれている入城から逮捕までの段落と短文報

告と呼ばれる逮捕から後の出来事の段落から成っていると結論づけている。

そして受難記事の伝承生成の諸段階が初めにアラム語の古いケリグマ、次に短文報告、長文報告、最後の段落としての個々の説話と各様の伝承のまとまりにより補充され、今日の四つの福音書にみられる形にまで発展したものと説く。次にイエスの最後の晩餐記事に文学批評を加え、これが非常に相異なる諸要素から成る伝承のまとまりを提示してはいるが、制定記事は元来一個の独立した伝承として流布していたとの結論に導いている。この記事のセム語要素やその色彩の濃い用語法から、イエスの晩餐のことばの伝承の独自性とその非常な古さが明らかにされている。

第三章では聖餐制定伝承の生活の座である原始教団の会食礼が対象となる。この伝承が会食礼において用いられた結果、聖晩餐記事の形成に影響を与えると共に会食礼において用いた定型を神聖冒瀆から守ろうとする努力の跡をみる。(表現の明瞭化、言葉の補充、異邦人に縁遠いセム語の回避と誤解を除く工夫)パンだけの祭り(Sub Unct)の痕跡が「パンさき」の表現に見られるとしている。パウロがぶどう酒の言辭にだけつけた付加語「飲むごと」に「ヤルカの記事にぶどう酒のくり返し命令の欠けていることに着目し、パンだけの祭りは最古の伝承の段階を表わしている最も早い時期に普及に行なわれていたと断定できるとする。最後の晩餐では食事をはさんでパンとぶどう酒の

分与がされたが、後にこれが普通の食事と分離して独立した段階が顕著に見られる。パウロのパラドクスにある「食事ののち」はマルコとマタイではパンとぶどう酒の言辭が無媒介に連続している。原始教団の会食礼のうち過越の夜の聖餐式はその異常な時刻のゆえに目立っていた。十四日教徒の過越祭を特徴づけた「断食の終止」は午前三時で、再臨の待望であったと論じ従来受難思想としての見解を退けている。そして断食の習慣はイエスの物断ち宣言から生れたもので、最初にあったのは礼典ではなくイエスの晩餐のことばと行為とであると結んでいる。

第四福音書が聖餐制定記事を含まないのはなぜか、この奇妙な現象について、後期ユダヤ教及び原始キリスト教の神秘的要素、隠蔽的話し方、及び聖なるものを冒瀆から守ることの事実から、聖なる定型を公衆にさらしたくなかったので意識的に聖餐制定記事を黙過したのだと説く。聖餐のテキストが礼拝に使用されたことがその伝承と定型化の上に影響を与えたが、聖餐のことばが専ら礼典のテキストの形で伝承されるという結果をもたらしした。

第四章はイエスの聖餐のことばの最古のテキストを探る。方法論的にはルカの長文テキストと短文テキストの検討から始める。過去八十年の聖餐研究の歴史で一つの転轍器の役割をはたしてきた経過とこれに対する解答が根本的に異なる理解を生ぜしめたことから考えれば当然の順序と言えよう。著者は第一版では一八八一年以来の短文テキスト優位の説を支持していた

が、今では長文テキストの支持者となっている。その根拠はもと長文テキストがパウロとマルコからの編纂と考えられていたが、言語上と文体上の緻密な考察から非ルカの用語法の顕著な徴をみてとり、ルカが礼典的テキストを用いていると判断したことにある。長文テキストの非パウロ依存の論拠はルカがパウロから二つの点で逸脱している、言語的にもパウロのものより古いことに求められている。このことからルカとパウロとの基本的一致は伝承にもとづくとの認識を生む。従って、著者は長文テキストに礼典的聖餐制定の第三の異型を見い出す。これはマルコやパウロより総じて進展している段階を示すが個々の点においては両者より古いと観る。

伝承の最古の形態を求めて聖餐のテキストの比較を次に試みる。過越の成就への展望においてはルカは配置と終末時の食事に対する展望の二重性においてマルコとパウロと異なる。

ルカは位置変更反対者であるからルカがマルコと異なる場合は常にルカが彼の特殊資料を用いていることになる。言うまでもなく、最古の伝承の探究に役立つのはセム語的要素とパレスチナの言語の特徴である。マルコ、マタイ、ルカ、及びパウロのテキストを一つ一つ緻密に分析究明した結果、次の結論を導きだしている。聖餐伝承のすべてのテキストのうちマルコは他をぬきんで最も顕著なセム語的要素を有する。ルカのテキストはセム語的要素もあるがギリシヤ語化の傾向がある。パウロにおいては文献的に最古のものであるにもかかわらずセム語の

伝承を言語的に変形したギリシヤ語化が可成り進んでいる。伝承の年代に關して言えば文書化したものの現在する最古のものはパウロの聖餐記事で紀元五四年頃のもので、パウロはこれを四十年頃アンテオケの教会で受けたと思われる。ルカは言語と内容の点でパウロより古く、パウロの伝承形態より以前の段階に遡源しうる。しかし年代的にさらに古い時代に遡るのはマルコで言語的にはパウロやルカより古い伝承の表現形式を有し、セム語的要素が非常に多い。従つてマルコが原伝承に最も近いものと提言する。

だが聖餐記事の共通の伝承の核はイエスの最後の晩餐の時に語ったイエスのことばを記憶保存しているものであり、本質的な点で信頼に価する記憶だと結んでいる。

等は開始せしめられた救いの業を神の目前に現出し、成就を懇願するのである（四二三頁）。

パウロの聖餐パラドシスに関して、現在する最古の文書化されたものとするところは万人の認めるところであるが、この伝承をパウロが改心後間もなく、紀元三十三年頃ダマスコの教会から受けたとは考えられないと退けることに問題を感じざるを得ない。この伝承のギリシヤ語的傾向をアンテオケの教会に求めなくては、彼自身が異邦人を意識してギリシヤ語化したもの

じ時に祝われた。しかしユダヤ人が食卓を囲んでいる時にキリスト教会では断食がなされていた。この断食は鶏の啼く刻になって聖餐の祝いでもって終止したが、この習慣はイエス自身の手本を原始教団が継承したものであるという以外に説明がつかないと論述している。

イエスの身代わりの死は救済の新しい神の契約の効力を生ぜしめる。そしてパウロによる聖餐の賜物はイエスの十字架による贖罪の死に与かることであると共に救済の共同体に与かることでもある。記念としてのくり返し命令の解釈においてエレミアスはユニークである。まず前世紀末から今世紀のはじめにかけて提唱されたヘレニズム世界における古代の死者の記念食事のための基金設定の定型による解釈を資料的裏付けをもって退けている。そしてパレスチナの記念の定型から理解されるべきだと語気を強める。エレミアスのユニークさは “*the first with awareness*” が “あなたがたがわたしを覚えるために” を意味するのは困難であって、 “神がわたしを覚えられるために” を表わすと説くところにある。即ち終末論的に方向づけられた命令とみる。 “イエスの弟子たちの群が再臨に至るまでの短期間のあいだ食卓の交わりに結合することにより、そして彼等がそれをおしてイエスを彼らの主として告白することにより、彼

聖餐のことばの意味を終末論的にメシア的食事の先取りとして理解して記念の定型の主語が神であると例証を試みているものの、神の想起の思想を退けることは疑問である。このゆえに現代聖餐論研究の著作と論文等にこの解釈に関する批判と反論が投げかけられている。しかしエレミヤスが聖餐記事がイエスのことばに遡源され信頼に価する伝承として論証し得たこと、「パンさき」の原始教会の行為と定型化した教会の主の晩餐とを一元的連続としてとらえている洞察は高く評価されるべきである。高く評価されても過ぎることはないと信じている。

George Eldon Ladd

Wm. B. Erdmans, 1974.

著者ラッド教授は、一九五〇年以来、カリフォルニア州、バ

サデナのフラー神学校で、新約学を担当している。数多くの論文(著)『Crucial Questions About the Kingdom of God, A Commentary on the Revelation of John, The New Testament and Criticism, The Presence of the Future, The Pattern of New Testament』などの著書を世に送っている。

本書は、著者の豊かな経験の中から生み出された、神学生を主な対象とする新約神学の教科書である。新約神学の課題を明確に提示しながら、著者の立場から積極的な主張をなしている。著者は、新約神学を定義して、新約聖書の各書のメッセージを、歴史的状況の下で説明することにあるとする(二五ページ)。それ故、新約神学は、必然的に、記述的学問となる。この理解が、本書の構成を決定していると思われる。新約聖書の構成に従って以下の六区分から組立てられている。特定の著者が主張する枠組ではなく、新約聖書正典本来の構成を、新約神学の骨組みとするのである。

一 共観福音書

二 第四福音書

三 原始教会(「使徒行伝」)

四 パウロ

五 一般書簡

六 黙示

しかし同時に、前提が方法論を左右する面をも、著者は重視する(五ページ)。第一部共観福音書の第一章序論において、

聖書神学と正典の関係、聖書神学における統一性と多様性の関係(新約聖書における歴史的展開を含めて)なども、正しく理解される(30-35ページ)。

第一部「共観福音書」は、以下の十五章に分かれる。(1)序論、(2)洗礼者ヨハネ、(3)御国の必要、(4)神の国、(5)救済の新時代、(6)御国の神、(7)御国の神秘、(8)御国と教会、(9)御国の倫理、(10)メシア、(11)人の子、(12)神の御子、(13)メシアをめぐる課題、(14)メシアの宣教、(15)終末論。神の国こそ、主イエスの宣教の中心である。神の統治、支配、主権である神の国は、イエス・キリストの人格、ことばと行為において、すでに、現在のものとなっている。しかし、神の国は、完全な意味では、いまだこの世に属していない。イエス・キリストの再臨における、完全な実現を待ち望むのである。「すでに」と「やがて」でもって表現される神の国の現在性と未来性は、「この世」と「きたるべき世」との関係において、最もはっきり示される。イエス・キリストにおいて、「きたるべき世」は、「この世」の中に、すでに突入している(68、69ページ)。

神の国の性格を考察する第一部前半に引き続き、10章以下では、共観福音書が描く主イエスについて直接取りあげる。そこで強調している第一の点は、当時の一般的なメシア観と、主イエスご自身が意識し、弟子たちに伝達したメシア観との違いである。当時のユダヤ人の期待したメシア観との葛藤を通して、主イエスのメシア性は示されねばならなかった。「主イエスの

「新約神学の研究史」と「聖書神学・歴史・啓示」の主題を論じながら、著者は、自己の立場を位置づけていく。つまり、「新約神学の研究史」においては、中世・宗教改革から始めて、一九二〇年以後の聖書神学の再興までの流れを見通し、その流れの中で、現代の新約神学が直面している課題を見る。現代の諸傾向としては、C・H・ドッド、O・クルマン、A・リチャードソン、W・G・クンメル、ブルトマン学派、J・エレミヤスなどを取り上げている。また、著者自身の立つ場である、アメリカにおける動きに焦点を絞っていく(23-25ページ)。その中で、聖書を、正典としてそれ自体の文脈において見ることを主張するB・チャイルド(Biblical Theology in Crisis, 1970)や、神の実在と歴史への突入を、何よりも十分に考慮すべきであると考えるG・ハセル(O.T. Theology: Basic Issues in Current Debate, 1972)などの立場に、著者は同意する。

さらに、前提の課題としては、神、罪、救済の根本から、啓示の理解、歴史の理解が具体的には鍵となり、イエス・キリストの人格、ことば、行為において頂点に達する神の救済の歴史の重要性を主張する。歴史の主なるお方が、歴史を超えて存在するばかりでなく、歴史的被造物の救済のために、歴史の中に働き給うのである。救済の歴史のユニークな出来事としての啓示は、神のことばは、神の行為であり、神の行為は、神のことばであるように行為・ことばは啓示として与えられる。救済の歴史の視点に立つて、歴史理解、啓示理解がなされるとき、

宣教は、神の国をもたらしした。しかし、人々が期待したものと違った御国である。イスラエルの王として、ご自身を認められた(マタイ二・2、ルカ一・32、ヨハネ一・50)。しかし、御国は、霊的な国であり、メシアとしての宣教は、霊的な宣教である。未来において、主イエスは、栄光の王(マタイ二五・34)であり、大いなる力の中に、御国は顕現する。しかし、一方において、メシアとしての状態は、王座ではなく十字架、栄光ではなく卑下、統治ではなく死を含んでいる。主イエスの役割は、苦難のしもべとしてのそれであり、ただ未来においてのみ、栄光のメシア的王である。人々に受け入れられていたメシア観は、根本的変換を経る必要があった(170-171ページ)。

第一部後半で注目すべき他の主張は、主イエスの教え、行為は、その意味、解釈と切り離すことができず、その解釈は主イエスご自身に起源を持つという点である。たとえば、14章では、主イエスの十字架の事実を、メシアとしての死、贖罪の死、身代りの死、犠牲の死、終末的死などの意味、解釈と不可分なものとして共観福音書は宣言していると明示する。

第二部は、(16)批評的課題、(17)ヨハネ的三元論、(18)キリスト論、(19)永遠の生命、(20)キリスト者生活、(21)聖霊、(22)終末論などの章を含む。16章は、序論的なものであり、ヨハネ神学へのアプローチに関する重要な提言である。共観福音書と第四福音書の相違として普通指摘される諸問題を無視すべきでないと思われながら、さらに根本的に、両者の間に構造的な特徴があると著

者を見る。つまり、共観福音書の現在と未来の継続的対比に対して、第四福音書の上と下、天と地、神の領域と世の領域などの対比をあげる(216ページ)。

また、最近の第四福音書の研究(死海写本との比較など含めて)に見る傾向として、第四福音書の歴史性が確立されていることを指摘する。こうして、共観福音書が、歴史であると同時に、歴史に基づく神学であることが認められてくるように、第四福音書の神学も、歴史上に生じた事実の解釈としての神学であって、歴史的・客観的事実、伝承から切り離すことができない(221、222ページ)。

以上のことから、第四福音書の研究課題は、ヨハネの思想を記述するだけでなく、共観福音書との関係を考察する必要があるとする。両者の根本的一致と特徴について、著者は、以下のような点をあげる。共観福音書も、垂直的・二元論的用語、概念を用いるが、終末論構造を強調している。ヨハネも、終末論的構造を認めているが、強調しているのは、垂直的構造である。また、共観福音書の「神の国」の宣言に見る「すでに」と「いまだ」の関係は、第四福音書の特徴的用語、概念と言われる生命、復活、審判などのいずれにも見ることができ。いずれの中にも、イエス・キリストにおける現在とともに、未来的要素が含まれている(204、207ページ)。

第三部として、「原始教会」(「使徒行伝」)を独立させているのは、注目すべきである。ここでも、特定の著者の見る原始教

会像ではなく、福音書と書簡の中間に位置する「使徒行伝」という新約聖書自体の枠組に沿って、原始教会の姿を描いていこうとする。(2)批評的課題、(3)復活、(4)終末的宣教、(5)教会などの章を含んでいる。

批評的課題としては、「使徒行伝」が、エルサレム教会の生活と思想の信頼すべき描写を与えていると論ずる。また、福音書がエルサレムから全ローマ帝国の異邦人教会へ進展していく課程の中で、ルカにとって最も重要と思われる出来ごとを、記述や口述の資料から選択していると著者は考える。

さらに、主イエスの復活の事実、教会の復活信仰、教会の存在自体の関係についての著者の理解と主張は、明確である。弟子たちが、主イエスの復活を信ずるようになるためには、何事かが生じたのである。弟子たちの信仰が復活の記事を生み出したのではない。復活信仰を生み出したのは、これらの記事の背後にある出来事である。復活の出来事と復活の信仰は、不可分であるが、同一視できない。そして、復活の事実が復活の信仰を生み出したのである(320ページ)。

復活の先行性と客観性とともに、復活の性格の理解が大切であると著者は主張する。主イエスの復活は、からだの復活であり、歴史において起り、キリストの教会を生み出した終末的な出来事である。教会は、終末的出来事によって生み出され、終末的メッセージを宣べ伝える終末的共同体である(322、327ページ)。

第四部「パウロ」は、二百十ページに渡る。そこには、(1)序論、(2)パウロ思想の資料、(3)キリストの外なる人、(4)キリストの人格、(5)キリストのみ業、贖罪、(6)キリストのみ業、義認、(7)パウロの心理学、(8)キリストにある新しい生命、(9)律法、(10)キリスト者生活、(11)教会、(12)終末論などの章を含む。

二七、二八章では、一章、一六章、二三章などと同様、批評的課題を考察する。その際、パウロのダマスコ途上の経験が決定的な重要性を持つことを確認する。つまり、イエスこそメシアであるとの信仰、異邦人への宣教、律法によってではなく、信仰による義認など、パウロの回心の経験に含まれている(366、369)。

さらに、パウロの使徒としての自覚と権威(379、382)について論じる。使徒としての権威をもって、パウロが宣べ伝える福音は、イエス・キリストの出来事の全体であり、その使徒的解釈である。つまり、イエスの死と復活の歴史的事実と、これらの出来事の救済論的意味の宣言である(383、386)。この際、主イエスの出来事は、単に過去の出来事ではなく、宣べ伝えられ、告白される宣教の業を通して現在の救済の出来事となる。そして、福音の宣教と受容は、聖霊のみ業による。こうした歴史的、宣教的、霊的性格を持つ意味での伝承(「コリント十一・2、十五・1」)、また、聖霊の直接的啓示、主イエスの出来事によって新しく理解される旧約聖書を、パウロ神学の資料と見る(388、390、394、395ページ)。

パウロ神学の内容自体の考察は、釈義を土台としながら、徹底的になされる。たとえば、キリストのみ業、義認と和解(32章)については、教理の重要性、旧約の背景について述べた後、義認の終末論的性格を強調する。つまり、未来の終末論的義認が、すでに現実のものとなっている面を、ロマ五・1や「コリント六・11」の釈義を通して主張する。そして、共観福音書において、神の国がすでに歴史の中に突入しているとの主張、第四福音書において、永遠の生命がキリストの中に現実となっているとの宣言、終末的復活は主イエスの復活において始まり、終末的聖霊は、「使徒行伝」の教会に与えられている主張などと対比する(442、443ページ)。さらに、義認が法概念的なものであること、義認の基盤と方法などについて論じている(444、449ページ)。

第五部では、ヘブル、ヤコブ、一ペテロ、二ペテロとユダ、ヨハネなどの一般書簡に見る神学を考察する。新約神学全体の構成の中で、ヨハネ神学、パウロ神学の占める中心性は、否定しがたいものである。しかし、新約聖書の統一性とともに各書簡性をも考えるとき、一般書簡それぞれに見られる神学の理解と、新約聖書全体における位置づけは、重要である。著者は、各書の歴史的背景に充分配慮しながら(たとえば、ヨハネの手紙の論文など609ページ)、各書に特有な用語、概念を整理しようとしている。また、各書それぞれの特徴とともに、いずれの書簡も、「すでに」と「いまだ」という共通な終末論的パター

ンを用いて、その神学を宣言していることを著者は指摘している(590、604、613ページ)。

第六部は、ヨハネの黙示録。全体の主題が終末論である黙示録の内容、解釈の方法などを論じながら、悪の問題、さばき、御国の完成など、この書の中心となる神学に焦点を絞って考察している。

以上のような目的、構成と内容を持つ本書の、全体的特徴を幾つかあげてみたい。

第一は、新約聖書の終末論的構成から、新約聖書の統一性を提示している点である。共観福音書、第四福音書、原始教会、パウロの各部分で、終末論を直接考察している章(15、22、25、38章)ばかりでなく、43章に渡る本書全体において、新約聖書の終末論的構成を強く印象づける。

第二は、本書の構成が、新約聖書正典の枠組に応じ、各聖書記者の多様性に配慮を払われている点である。共観福音書という区分だけでなく、さらに、マタイ、マルコ、ルカの各福音書記者の特徴が取りあげられるべきであろう。しかし、第四福音書の取り扱い方から、各福音書記者の神学にどのようにアプローチすべきであると著者が考えているかは、明らかである。

第三には、各区分の序論(1、16、23、27、28章)において、批評的課題が検討され、異なる立場の著者たちとの対話がなされることを通して、著者の主張がより客観性を持つようにな

っている。

さらに、教科書としての目的から当然なのであるが、各章、各主題ごとに、代表的な文献があげられている。また、各章が、小項目に分れ、理解しやすい表現で記述されている。

新約神学へのアプローチという方法論の課題についても、また、新約神学の内容がいかに豊かな多様性を持つものであり、その中心は何であるかなどについても、本書は、我々にとって良い手引となる。

(東京キリスト教短期大学、日本基督神学校講師)

Edwin Yamauchi

PRE-CHRISTIAN Gnosticism

Tyndale Press, 1973, pp. 208

宇 田 進

最近の新約研究において多くの論議を呼んでいる問題の一つは、新約聖書とグノーシス主義との関係をどうみるかということである。ことに、宗教史学派の影響を強く受けて発達してきた研究サークルにおいては、キリスト教成立以前のグノーシス主義(Pre-Christian Gnosticism)の存在を仮定し、それによって新約聖書の解釈・解明を進めて行こうとする傾向がますます定着しつつあるようである。

今、仮定されている主な点をあげてみると次のようなものがある。(1)ブルトマンは、グノーシス主義をキリスト教以前から発達したものであるという仮定に立って、新約の贖罪者の思想はもとグノーシス教済者神話に由来するものであるとみる(詳しくは『新約聖書神学』参照)。(2)ヨハネ福音書は多くの意見のわかれるところであるが、ブルトマンやシュミットハルスなどは、その著者をグノーシス的セクトよりの改宗者とみなし、その資料背景をマンダ教文書に求める。たとえば、光と闇の二元論、贖罪者の思想、ことにキリストを人間の姿をとって遣わされた宇宙的な存在としていること(一・一四)、キリストは「遣わされた者」としてこの世に來たとして(一〇・三六以下)、「わたしは、世の光です」(八・一二)という宣言、ユダヤ的な未来待望から復活の現在の経験への終末論上の転換(五・二四～二五、一二・三一)、善き羊飼の説話(一〇・一一～一八)などがグノーシス的世界より取り入れられたものと推定されている。(3)共観福音書について、古くライツェンシュタインは、福音書のQ資料の背景にマンダ教文書を考えていたが、今日、一部の学者は、グノーシス主義の「原人・救済者」の思想が、ユダヤ的な「人の子」待望の教理の源泉であるとみている。(4)使徒行伝については、ブルトマンが三・一五と五・三一にグノーシス主義の救済者への関連を、また、キュンメルが二〇・二九以下に反グノーシス的弁論を認めている。(5)かつてブセットの『キュリオス・クリストス』(一九一三)がパウロ理解をグノー

シス主義と結びつける端緒を開いたわけであるが、今日でもこの傾向は強い。④初期の手紙について、たとえばシュミットハルスは、第一、第二テサロニケにおいて警告されている誤説をグノーシス主義とみる(第一テサロニケ四・三～六にでてる警告はグノーシス的品行に対するもの。同四・一四以下におけるキリスト再臨以前に死んだ忠実な信徒の未来の復活の主張は、未来の復活を否定するグノーシス主義に影響された信者たちを正すもの等)。普通、ガラテヤでのパウロの論敵はユダヤ主義者とみられているが、シュミットハルスはこれをユダヤ的グノーシス主義者とみている。一方、ブルトマンによると、かなり多くのグノーシス主義の特徴(修飾されたものではあるが)が、ローマ人への手紙に見出されると云われる(たとえば、五・一二～二二においてアダムの墮罪を全人類の罪と死に結びつけていること、六・五にでてるキリストのからだへのバプテスマ、八・二〇以下の被造世界の墮落、八・三八以下の諸力、一三・一一～一三の警告等)。他方、コリントにおける論敵をグノーシス主義とみる説が、一九〇八年リュットゲルトによつてはじめて主張されて以来、ブセット、ライツェンシュタイン、パウエル、ブルトマン、ヘンヘン、シュミットハルス等の学者によつて支持されて来ている。極端な場合であるが、シュミットハルスは第一コリント一〇・一六以下をキリスト教の聖餐ではなく、ユダヤ的グノーシス主義の聖式とみている。⑤獄中書簡について、たとえば、ピリピ二・五一～一の「キリスト讃歌」の

原型は、イランの「原人」の神話であったとする説が、一九二八年にローマイヤーによって提唱されたわけであるが、今日、ケーゼマンはその原型はグノーシス救済者神話の「原人」であったと主張している。最近、コロサイ人への手紙にでてくる異端をユダヤ的グノーシス主義とみる傾向が強い。ポルンカムによると、希望が未来的ではなく現在の説かれている一・五、二三、二七、二・八の「哲学」に対する警告、一・一九の「満ち満ちた神の本質」(プレローマ)、一・一八や二四におけるキリストの「からだ」としての教会、などがその証拠とみなされている。エペソ人への手紙については、四・八一〇の天的救い主の下降と上昇、二・一四一―一六の「隔ての壁」、二・一五の「新しい人」および四・一三の完全な人としての天的人間の描写、五・二三以下のキリストと教会との天的結婚などが、シユリアーなどによつてグノーシス的なものとして指摘されている。◎牧会書簡について、たとえば、ブルトマンは、第一テモテ三・一六にグノーシス救済者神話の修飾された形のものを見る。また、復活はすでに起つたという問題(第二テモテ二・一八)、結婚やある食物を禁じる問題(第一テモテ四・三)、世界の二元論的理解と禁欲的諸規律(第一テモテ四・三一五、テトス一・一四一―一五)等が、グノーシス主義と関連させられる点である。(6)ヘブル人への手紙については、たとえば、ケーゼマンは、神の民の旅と安息の追求(三・一一、一八、四・一、三)、一二章の神の子、神の子は神の民を完全な者とされるということ

(二・一〇、五・九、七・一九、天的大祭司の敘述の中にみられるユダヤ的メシヤ待望等にグノーシス主義との関連をみている。(7)ペテロの手紙については、たとえば、ブルトマンは、第二ペテロ二・一の「にせ教師」はグノーシス主義者たちであったと考え、さらに第一ペテロ一・一三での戒め、キリストはもろもろの権威を従えて天に昇つたという主張(第一ペテロ三・一二)、キリストが捕われの霊たちのところに行つてみことばを宣べ伝えたこと(第一ペテロ三・一九以下)などのうちにグノーシス主義の影響を見取っている。(8)ヨハネの手紙については、たとえば、ブルトマンは、「悪魔から出た者」(第一ヨハネ三・八)と「神から生まれた者」(同二・二九、三・九)の分離、罪を犯させないようにする「神の種」(同三・九)、真理と偽りの対立(同二・二二、二七)、光と闇(同二・五)、全世界は悪い者の支配下にあるという思想(同五・一九)の中にグノーシス主義の影響を認めている。また、パウロは、第三ヨハネの九節にでてくる「デオテレペス」をグノーシス主義者とみている。(9)黙示録に関しては、二章の「ニコライ派」に対する非難の中にグノーシス派を思わせるものがあると(二・一四、二〇―二二)、一部の学者によつて主張されている。もしも以上のことが事実であるならば、グノーシス主義と無関係で新約聖書を解釈することはできなくなってくる。

はたしてキリスト教成立以前のグノーシス主義は存在していたのか。一世紀にグノーシス主義はどれほど発達していたの

か。グノーシス主義は、初期のキリスト教に直接もしくは間接に影響を及ぼしたのか。最近脚光を浴びている新しい資料や研究はこれらの諸問題にどのような結果をもたらしているか。△キリスト教成立以前のグノーシス主義を主張する学者の方法論上の前提はどのようなものなのか。著者(日系人)は、本書の中で福音主義の立場から、これら一連の重要問題と意欲的に取り組んでいる。

全体は十二章より成っている。まず第一章の序論において、著者はグノーシス主義の定義の問題を取り上げている。今日、研究者の間には大別して「狭義」と「広義」の二種類の定義が存在している。概して狭義の意味にとる学者は△キリスト教成立以前のグノーシス主義をに対する決定的な証拠はないという立場をとっている。これに対し広義の意味にとる学者は、しばしば神秘主義や密儀教や仮現論とはほぼ同義に理解し、新約聖書のみならず初期キリスト教の他の文書の中にもグノーシス主義の跡を見ようとする傾向が強い。従来、グノーシス主義はキリスト教成立後に起つた一つのキリスト教の異端運動であつたという見方が伝統的なものであつた(もちろん今日この見解をとる学者もかなりいる)が、宗教史学派の流れをくむ最近の研究においてはキリスト教成立以前の現象と考えられている。だが、一口に以前と云つても、その理解の問題となると諸説あつて必ずしも一致したものがあるわけではない。そのため一九六六年に、イタリアのメッシーナ大学において「グノーシス主義の

起源に関する国際コロキウム」が開かれ、席上「Pre-Gnostic」と「Proto-Gnostic」に関する共通の理解が追求されたいきざつがある。「Pre-Gnostic」は、キリスト教成立以前に存在していた、のちにグノーシス主義そのものの中に吸収されて行つた諸要素をさし、これらの要素は厳密な意味でのグノーシス主義を構成するものではないとされ、「Proto-Gnostic」は、二世紀に完全に発達したグノーシス主義に先行する初期の発端としてのグノーシス主義をさすものとされた。以上の定義問題は、研究の状況をより正確につかむためにどうしてもメモされておかななくてはならない基礎的なことである。

第二章は、△キリスト教成立以前のグノーシス主義を前提としてなされる新約聖書の解釈の事例と、それに対する反論もしくは批判的見解の紹介にあてられている。

第三章以下終章までは、△キリスト教成立以前のグノーシス主義の証拠の精査にあてられている。すなわち、第三章においては「教父の証拠」という表題のもとに、ドシテウス、「魔術師」シモン、「大いなる宣教」、イグナティオスの手紙が扱われている。第四章では「ヘルメス文書」のグノーシス主義の問題が取り上げられている。第五章ではイラン系の資料(ゾロアスター教、ミトラ教、マニ教など)について論じられている。第六章ではシリア系の資料(「トマスによる福音書」、「ソロモンの頌歌」、「真珠の歌」など)が検討されている。第七章は、グノーシス主義研究史上に一時期を画するものと考えられている。

るエジプトのナグ・ハマディにおいて発見された(一九四五—六六)いわゆる「ナグ・ハマディ文書」(一三のバピルス・コ一デックスを含み、その文書数は五三にのぼるもので、その意義は「死海写本」に匹敵すると云われている)の検討にあてられている。特に、「聖なるエウグノストスの手紙」、「イエスの知恵」、「アダムの黙示録」、「セームの釈義」などが検討されている。第八章ではマンダ教史料、第九章ではユダヤ系の資料、第十章ではいわゆるキリスト教成立以前の救済者神話の問題がそれぞれ分析検討されている。

そして終章においては、方法論の問題が扱われており、これが今日ハキリスト教成立以前のグノーシス主義を主張する立場に対する著者の総括的批判が展開されているところである。

その主なものとして次の点があげられている。(1)宗教史学派とその最近の後継者たちは、ずっと後代の資料を使ってハキリスト教成立以前のグノーシス主義を立証しようとしている。ピールによると、これは初期の推進者であるライツェンシュタインの始めたものであり、実は彼の方法の「アキレス腱」であると思われる。例えば、マンダ教史料は、リーツマンによると七世紀のもの、ウィルソンによるとAD四〇〇年以前にはもってこれないとされている。(2)ブセッ、ブルトマン、シュミットハルスなどの研究に認められる誤った仮定の一つは、グノーシス主義は時代を通して一つのまとまった現象であったので、その存在と他へ及ぼした影響は、その構成要素、例えば、グノーシス

主義の用語であると仮定されている表現を調べることによってつきとめることができるという考え方である。しかしこれは部分によって全体を証明しようとするものではないだろうか。(3)ブルトマンはヨハネ福音書の背後にグノーシス主義の存在を仮定し、それから、そのグノーシス主義の復元のためにヨハネ福音書を主な資料として使っている。リチャードソンは「これは議論点の虚偽である」は「先決問題要求の虚偽」である。なんとすれば、新約聖書は他のまったく違った解釈を許すからである」と云っている。(4)単なる類似とから平行のケースと、依存関係の証拠である平行のケースとをもっと慎重に区別して行くべきである。(5)ヨーロッパの学者に認められる一つの傾向は、権威者ともくされる先駆者の前提や研究成果をあたかも証明済であるかのごとく継承して行くことである。この点で特にコルベの批判(Die religionsgeschichtliche Schule: Darstellung und Kritik ihres Bildes vom gnostischen Erbsenmythus, 1961など)に聞けべきである。(6)「ナグ・ハマディ文書」のような直接初期キリスト教の文書ではない資料をハキリスト教成立以前のグノーシス主義を裏付ける重要な証拠であるとみる傾向が強い。しかし著者は、「non-Christian therefore pre-Christian?」と疑議を申し立てている。著者の立場は大体においてウィルソンの立場に近いようである。

グノーシス主義に関する研究と論議は現在進行中であり、こ

れからもいろいろな発表が予想される。多くの方々が本書を読まれ、この大きな問題にあえて取り組まれた著者の学究に触れられるように、そしてそれに啓発されてこの面での研究が日本の福音派の中でも育って行くことを祈り願いつつ、簡単な紹介を結びたい。

(日本基督神学校教授)

B・A・ゲリッシュ著 倉松功、茂泉昭男訳

『恩寵と理性——ルター神学の研究』

一九七四年 聖文舎

春 名 純 人

〔一〕

B・B・ウォーフィールドは「宗教改革の神学」なる小論の中で、およそ次のような主旨のことを語っている。「宗教改革は一つの神学体系を他の神学体系と置き換えることであった。そののみがルターにとつての宗教改革であった。宗教改革は何よりも第一に教理上の再発見であり、それは、救はただ神の恩恵によるということであった。われわれは、律法の行いによつて救われるに非ず、ただ神の恩恵によるということであった。宗教改革は『聖書の独占権』の旗の下に戦われた抗争であつた。」

た。『聖書のみに権威がある』ということとは『聖書のうちに教えられている事柄にのみ権威がある』という意味であり、宗教改革者たちが聖書のうちに見出した最大の教理は「救における神の独占活動」である。これは信仰義認といわれる教理であり、結局、『一切の人間の業を否定し、救においては、ただ神の恩恵にのみ依存している』ということとその内容としていた。」

事実、ルターは、エラスムスが「ディアトリベ」において、救の恩恵性を承認しながらもその光を見るか見ないかは人間が目を開くか開かないかというごく僅かな人間の行為に依存するとして、善き業による救を論じた時に、それは救いを人間の最大の努力、「全き十分な、完全な大いなる且つ多くの熱心と努力」の価としてのみ獲得し得ると説いたペラギウスの異端にまぎって贖罪主キリストを否定するものであると「奴隸的意志」において反駁している。信仰義認は、救における神の独占活動であり、聖書の福音は罪の中にある人間の絶対的無能力と救いにおける恩寵の独占活動であった。この恩寵と罪との対立がルター神学の根底にあるグルント・モティーフである。

ルターは、律法の一点一劃を守ることのできない罪人が、恩寵によつて与えられる信仰によつて義人として神の前に立つことができるのは、キリスト者はキリストを信する信仰において律法の「凝縮された完全成就態」(eine kurze Summe—Von der Freiheit eines Christenmenschen, §7, §9)を持つからだとい

信仰義認を説明している。キリストを信する者は神の前で律法の完全成就の実質を持って―キリストの義をまとして―義人として立っている。ルターは鋭い信仰の目はごく些細な一点においても人間の行為による救いの主張が、最大の努力による救いの主張にもまして聖書の救いの恩恵性の教理を台無しにしてしまうことを的確に見抜いていた。救いにおける人間の行為の主張は、理性の自己主張と傲慢にあるとして、彼の神学の基調としての恩寵と罪との対立は同時に恩寵と理性との対立でもあった。

ゲリッシュはこの「恩寵と理性」の対立において、ルターにおける救いの恩恵性の主張を余すところなく描きながら、同時に、単に反理性主義者ではないルターの姿を、ルター神学の根本にある二元的構造に即して示しつつ、信仰に導かれる人間の思维的認識の機能としての理性の正しい位置づけを示そうとしている。

(二)

ルターが理性に激しい非難を浴びせる時、実は理性そのものが非難されているのではなく、理性の本質を弁えぬ自惚と越権、自然の人間の律法主義の立場を意味する理性、あるいは固有の領域を越えた傲慢なる理性の臆見が非難されているのである。この書物は単なるルターにおける信仰と理性の関係について論じられた哲学の研究書ではない。ルターの激しい理性攻撃

間的領域」と天上の王国（霊的・永遠的領域）の二元論である。以下、この二元的構造に即して理性の機能と働きを見る。

(一)「自然的理性」 理性はまずこの地上の王国においては自然的理性(natural reason)として機能するので、自然的理性は自然的、時間的、地上的な固有の領域で支配する、神のすぐれた賜物としての健全な理性である。それは、この世的な多くのこと、すなわち、計算をし都市を建設し、王をたて、法律を定め、よく統治することができる。この自然的理性の機能が正當に働くこの地上の王国においては、理性は正しい導き手であり、自律的である。理性は、理性固有の本来の場所においては正しく、政治的、家庭的、自然的事柄について語る場合、正當に働くことができる。しかし、このことは、理性は自然的領域においては無謬であるということではなく、悪魔の侵害によって腐敗している面が勿論あるが相対的に健全であり自律的であるということである。しかし、ルターは人間の自然的諸力の大部分は墮罪によっても腐敗していないことを認めている。理性がこれらの限界（自己固有の自然的領域）の中で使用される限り、理性はすべてのものの中心であり最上のものである。理性はあらゆる芸術、医学、法律の案出者であり、女王であり、この世において人間の所有する一切の知恵、力、徳、誉れの案出者、女王である。理性はこの世の王国においては神の賜物の中で最も偉大な評価を絶した贈物である。この世は理性の王国(regnum rationis)であり、理性はその理解力と知恵によ

の真意を探り、改革者ルターの立場をスコラ哲学や人文主義と対照的に、その根本において明らかにしようとしているのである。ルターにとって信仰と理性の問題は認識論的問題ではなく救済論的問題であり、「信仰」と「理性」は二つの異った宗教性と二つの異った救済の方法を示しているのである(二四八頁)。

この意味の「理性」は律法主義的行為義認の立場、すなわち、固有の領域を離れた傲慢な理性の臆見の立場を意味する。それ故にルターは理性に激しい批判の言葉を投げるのである。したがって、この「理性」に對立する異った救いの道は「信仰」よりは「恩寵」であり、恩寵による信仰義認の立場である。それ故、書名も「恩寵と理性」なのであり、この意味における「恩寵」と「理性」は對立的であり救いの二つの道である。このことを明確に主張した上で、ルターの神学がだからといって反理性主義、非合理主義、テルトリアヌス主義ではなく、固有の領域における自然的理性と再生理性の権利の擁護を、「世の王国」と「霊の王国」の二世界統治説に基づいて示そうとする。このようにして、理性に対する一見矛盾に充ちたルターの発言が整理され、見事にルター神学の根本構造が解明されている。われわれは、このことを踏まえた上で、いわゆる信仰と理性の問題に限定してルターの理性観を見てみたい。

(三)

ルター神学の根本にある基本構造は地上の王国（自然的・時

って地を従わせる。しかし、理性はこの地上の王国の領域を越えて天上の王国に属する事柄について発言する時、すなわち宗教的領域に入ると正しく機能することはできない。理性は理性固有の分野に拘束されているので宗教的次元の事柄は理性の王国の彼岸にある。問題は自然的な事柄(naturalia)と霊的な事柄(spiritualia)を区別することである。霊的な事柄に関する霊的諸力は確かに腐敗しており、霊の王国においては理性は盲目であり無力であり神を愛さず律法を守らない。

(二)「傲慢な理性」 理性は神の王国に関する事柄、罪の認識、罪や死からいかにして逃れるかというような事柄、霊的知恵について何も知らないし、また多くの間違った判断を持っている。天上の王国へのわれわれの案内者は聖書であって理性ではない。理性でもって御言葉を測ってはならない。人間の理性は神のなすところに常に反対する。理性は過ぎゆくもの(temporal things)を経験するにすぎない。このように、理性は霊の王国においては適切な認識の機能ではない。霊的な領域はキリストの王国(regnum Christi)である。御言葉を受取るのは理性ではなく信仰である。地上の王国と天上の王国という二つの認識領域の区別に相即する二つの認識能力としての理性と信仰が峻別されている。ルターは、同時に、前者を哲学の領域、後者を神学の領域と考えている。哲学は感覚的認識、時間的事物についての認識、経験され概念化されるものについての認識であり、神学のかかわる不可視的、永遠的、天上的なものについて

は全くの無知である。スコラの誤りは、この自然的理性による思弁を霊的王国の中に持ち込んだことであり、哲学と神学とを混同したことであると言う。ルターが理性に対する非難を極めて激しくする場合にこの非難は霊の王国を侵害する傲慢な理性に向けられている。理性が固有の領域を越え限界を越えることが傲慢 (superbia) の罪の本質である。傲慢な理性 (arrogant reason) とは信仰の領域、霊的永遠的天上の領域を侵害する悪魔の娼婦としての理性である。

(三) 「再生理性」 霊の王国においてはキリスト者の理性は再生理性として機能する。信仰以前 (ante fidem) の理性使用と信仰以後 (post fidem) の理性使用の区別を対照させている。信仰による照明の結果、理性は全く新しい諸前提、もはやこの世の事柄の中で得た経験から得られたものではなくて、聖書の中に啓示されている諸前提と共に働きはじめる。このように、理性は信仰以後においては信仰以前と同じではない。すべては変えられる。これが御言葉と聖霊による再生である。再生によって人は新しい識別力、新しい理性によってすべてを違ったふうと考え、違ったふうを意識する全く新しい人間になるのである。自然的理性は理性の低い部分として家政や政治などの時間的事物に関与し、再生理性 (regenerate reason) は、理性の高い部分として、神の御言葉の中に啓示された宗教に属する事柄をひたすら学び瞑想する。再生理性は、ある場合は信仰の別名であり、そうでない時は御言葉によって提供される事柄に関

性の判断によってわれわれに対する神の意志を理解しようと努力する。傲慢なる理性は恩寵による義認の教えを理解することができず、御言葉から考えず自分中心に考えるので業の信仰を主張し神の前で自らの業によって自らを義とすることができると考える臆見 (opinio) を産み出すのである。律法を遵守することによる義が傲慢なる理性の産み出す臆見である。信仰によって照らされない理性は必ず誤った思弁の推論を行って律法主義的臆見を産む。第二部第六章「理性と律法」はこの書の中心であり、結局、ルターが攻撃しているのは律法主義なのであって、理性が律法に負担する時、理性と律法が共に批判されているのだとして恩寵による信仰義認が強くルター神学の中心点として強調されている。理性が固有の限界を越えて霊の王国に侵入することが思弁であるとすれば、戒めを守ることによって救われると考えることは一種の思弁にふけることである。神の言葉による拘束を拒む傲慢な理性はただ偶像礼拝に至るだけである。

(四) もちろん、聖霊によって照明を受けた理性にとってさえ、なお秘義は残る。しかし、自然の光である理性を困惑させた多くのものを恩寵の光が明らかにしたごとく、さらに、今は鏡を見るように臆なるものも最終的に解決されるとして天国的直視の段階を示してこの書は閉じられる。

してなされる秩序ある思惟の機能 (the organ of orderly thought being exercised upon matter provided by the Word — 原文二四頁。この部分の訳疑問) である。再生理性は常に神の御言葉に従って信仰の領域で謙虚に奉仕する、信仰の侍女としての理性である。再生理性は信仰の認識的、知性的側面 (faith's cognitive and intellectual aspects) として信仰の中に吸収されてあるのであって、決して信仰の事柄を自律的に判断する能力ではない。再生理性は信仰に従属し、聖霊によって照明を受け霊的な事柄に仕えるようになった「正しい理性」、「新しくされた理性」である。ルターが知識の源は経験と啓示であると言う時、あの二元論を銘記すべきである。理性が固有の自然的地上的領域を踏み越えない限り、自然的感覚的時間的事物について経験的概念的認識を持つことができ、地を従わせ、統治し、よき学術を樹て、市民的義をもたらず。しかし、市民的義は外的な義であり、人間の救いにかかわる神の前での義をもたらずことはできない。再生しない理性、照明されていない理性が聖なる事柄に対して発言するならば、それは傲慢な理性であり、この理性は全くの盲目である。信仰の事柄は全く御言葉の啓示とそれを受容する信仰によって導かれる。この信仰の認識的側面が再生理性である。理性が三元的領域の区別を弁えず固有の限界を越えて人間の内的救いにかかわる霊的な王国に侵入して、その健全性、自律性を主張しようとするので傲慢な理性となり、神の主権を穿鑿し、神の言葉によらないで理

【四】

最後に、自然理性は地上的、自然的、時間的領域において健全であり、自律的であるという主張について疑問を提して終りたい。例えば政治的とか家庭的とかこの世の王国に属する事柄の認識とこの世における行為においては、キリスト者の理性と非キリスト者の理性は共通の場に立つて機能する同じ健全な自然的理性と考えることはできない。キリスト者の理性は自然的事柄の領域も被造世界の領域として神の主権の下にあることを知っている。信仰の認識的機能としての再生理性によってキリスト者は思惟し行為するので、キリスト者は神のこと、人間のこと、自然のことすべて全領域的に神との関わりにおいて生きる。したがって、キリスト者にとってすべての領域は宗教的である。temporal things の領域と宗教の領域を分けることは危険である。悟性の関わる自然的、時間的領域も贖われた者の証しの場として存在し、キリスト者の召命が具体化していく場である。したがって、地上的事柄に関わる理性としての悟性も再生理性の枠の中で位置づけられなければならないと思う。家庭、国家、学問、芸術、また人間の所有する一切の徳、力、誉れ、これらのことはすべてキリスト者と非キリスト者において意味が根本的に異ってくる。キリスト者は、非キリスト者と共通の共同的に樹立する市民的正義、学問、芸術においても、その究極の目標が神讚美にあり、その目的が神の国の建設と信仰

的有機的關係にあることを知っている。それゆえ、自然的地上の領域においてもキリスト者の営みは非キリスト者の営みと質的原理的にすっかり違っている。非キリスト者のこの世における営みは、神との関係において、地を治め従わせるという神によって与えられた目的には応えていない。秩序を共有することと、意味、目的を共有することとは根本的に異ったことである。自然理性は救いのことを知らないと同様に地上のことも神との関係において正しくは知らないものである。贖われた理性は罪と救いのことを知っているのと同時に、神によって造られた世界のこと、人間の罪と共に墮落した世界のこと、贖われ回復されていく世界のあること、終末の審判を経て完成される神の国のことを地上的制約の中で知っている。根底に置くべき基本構造は世の王国と霊の王国の二元論ではなくて、創造―墮落―キリストによる贖いの根本構造である。この構造によってキリスト者は一元的に全領域を觀るし非キリスト者は自律的理性によって一元的に全領域を觀る。キリスト者の理性は理論理性としても実践理性としても神の御言葉啓示にすべてを包摂して思惟し、判断し、行為する能力である。ルターの二元論は誤った哲学と神学の区別を産み出している。再生理性の学として、御言葉に基づいてすべての実在を首尾一貫して体系的に考察するキリスト教哲学は可能である。被造世界の全体を、全実在の構造の意味連関、被造的法秩序の連関において問うことはキリスト者の召命としてのキリスト教哲学の課題である。「キリスト

者の自由」の冒頭の第一のテーゼにおいて説かれるキリストによって根元的解放と自由を与えられた自由なる君主としてのキリスト者が、第二のテーゼにおいて示されるすべてのものに奉仕する僕として、奉仕と証しの道に真に転ずることのできる鍵は、二元論の克服と再生理性がこの世と有効に関わるための理性の再規定ではないかと思う。この世の事柄においては非キリスト者と区別のない共通の立場に立つのではなく、またこの世の事柄を無視するのでもなく、純粹な福音の立場に立つて有神論的な文化の建設を志向することが重要である。

このゲリッシュの書物によって、ルターの聖書の中心的教理への覚醒を今日のような混乱した事情の中にあつて、特に静かに顧みることの重要さを想わせられたし、ルターの中に自然理性―再生理性―直視というダイナミックな理性把握の構造をみたことは新鮮な喜びであつた。それと共に、二元論を克服して、この構造を創造における理性―墮罪における理性―贖われたキリスト者の理性―直視的理性という構造において発展的に扱えることが重要なことと思われた。

いづれにせよ、ルター神学の門外漢に、その根底に横たわるルター神学の根本構造を明確に指摘してくれた本書は、今後、膨大なルターの著作を正確に読み、かつ理解するために資するところ大であると思ひ感謝している。読みごたえのある本格的な研究書であつた。

〔関西学院大学助教授、神戸改革派神学校講師〕

メルル・C・テニー

カール・F・H・ヘンリー

編

舟喜順一訳編

『聖書論論集』

一九七四年 聖書図書刊行会

小島 彬 夫

本書は元来米国において独立して編集された二つの論集の中から二十の論文が選択され日本の読者のために一つの論集とされたものである。その一つは一九五八年にカール・ヘンリーによって編集された『啓示と聖書』であり、これから二十四のうち十五の論文が取られた。もう一つは一九六八年にメルル・テニーが編集した『聖書―啓示の生きたことば』であり、これから十のうち五の論文が取られた。このようにして本書に収録された二十の論文は適切に組み合わされ妥当な配列をえて一つの論集にされ提供されるに至った。

これらの論文は欧米の福音主義的神学者たちによって執筆された。どれを読んでも彼らの立場は極めて明瞭である。それはプロテスタントの伝統的な保守的正統的な立場を現代に継承している。すなわち聖書の神的起源と權威、聖書の言語靈

感・充全靈感と無謬性をはっきりと信じ主張する立場である。しかし彼らはその主張を単に伝統的な枠組・領域の中で自閉的防禦的硬直さをもつて繰返しているのではない。もつと開放的積極的適応性をもつて現代の状況と挑戦とニードのただなかでその立場を大胆率直自由に語っている。メルル・テニーが序文で「この収録された論文は啓示された神のことばに関する福音的神学者の考察を積極的なまた時代に適した仕方です。示そうとして書かれたものである。」この書の意図しているのは歴史的真理を提示しながら現代の用語で語ろうとすることである。」と言っている通りである。

これらの学者たちはそれぞれの専門領域から個性的なユニークな学究の成果を提供してくれているが、同時に彼らの中に共通した問題意識が共有されており、ここにこそ現代におけるもつとも重大な事が指示されているのを認めることができる。それは一言で言えば現代における福音主義的聖書觀の提示ということである。これは自由主義・新正統主義の聖書觀を危惧し、不満とするだけではなく、ともすると今なおありがちな現代との交渉を欠いた硬直的な正統主義の聖書觀にも同調しない。これらの動向についてはカール・ヘンリーがその序文の中で精しく述べている。

さて評者は刊行されて間もなく本書を入手した。大いに関心があつた。しかし読み始めたもののあれこれやっているうちに途中でストップしてしまった。読書にもいろいろくせがあるも

のだ。多読速読はおよそだめだがそれでいて読み始めるとゆくりでも読み終らないと気が済まない。ところが今度はどういうわけか不意ながら中途で足踏み状態となった。年のせい健康の不調さからか根がなくなったものだ、などと考えていたら書評を頼まれてしまった。しかも機関紙の編集上これが真夏にかかるのだ。いささか苦業だ。まあしかしともかくもう一度最初から読み直しにかかった。そして今度はいささかなりとも責任感が推力となったせい何か何と一読することができた。感じたことは一つ一つはそう長い論文ではないのだが概してどれも内容が充実していて読み度がある、ということだった。一気呵成に読もうとするのにはよほどの情熱とタフさが必要なかも知れない。しかし今の私のようなものには気長に腰を据えて読むのが一番いい。ともあれ読了してみると誰にでもぜひ精読してもらいたい、という気持ちになった。何しろ「聖書論」といってもいろいろの領域—教義学、弁証学、聖書学、教理史など、多方面から論文が集められていて題名もなかには現代的なものを特に反映していない伝統的なままのものもあり、つい読者の関心によって全体を通読するよりもあれこれを抜き出して読んでしまうようになりがちなのではなからうか。こういった論集のつねで各個の論文が相互に関連を持ちつつも独立している分野を持っているのでそうなり易いのだが。しかしこういったものは日本では始めてのものであり、私たちの興味によって左右されることなくどれも等しく謙虚になつて学んでみる必

要があると思う。私のように半強制的で（もつとも承知で引き受けたのだから自由なもののだが）摂理的な要因でやつと読むような場合もあるのだが、ともあれ本書を精読するならば多くの事を学び、啓発され、方向づけられ、さらに追求すべき領域を発見させられてじつに有益であると思う。

いささか個人的所感が多くなつてしまつたが、以下順次収録されている論文を簡単に紹介しながら、適時寸評を加えて責を果たしたい。

1 啓示の伝達（ケネス・S・カンツァー）

「聖書論」の最初の論文が啓示の伝達であることはまことにふさわしい。聖三一の神はいま人々を聖書の使信に聞くことによつて御霊の照明により御子イエス・キリストの救いに与らせご自身との交わりに入れられるのだが、本論文はその間の神の啓示の性質とその伝達・受容について述べている。現代の主要問題が啓示の問題であることを確認しながら現代の啓示観を検討し神が定め作られた聖書の啓示の性質を明らかにし、その伝達・受容までのことを説いている。

2 歴史的・人格的啓示としての特別啓示（パウル・K・ジュウェット）

これはもつとも興味深く読んだものの一つである。「歴史を啓示の媒体と見る聖書の歴史観」が解明され、創造・贖い・完成に至る救済史がその出来事とともに神の解釈が伴つたものとして人格的に伝達されるところに啓示としての性質が成り立

つことが指摘される。現代の歴史観が分析され、またエブナ1、ブーバー、ブルンナーに受けつがれた人格研究によつて歴史的・人格的な特別啓示—それが聖書のいわゆる命題的啓示と成つたのだが、これが現代的に新鮮に説かれていゝるのには大変共感を覚えた。

3 文書としての特別啓示（ネッド・B・ストーンハウス）

ここでは言うまでもなく神の特別啓示の文書化のことが述べられている。神はご自身の民の必要に応じて特別啓示を具体的に聖書という形で与えられたわけであるが、この論文はこれを神の自己啓示の過程の歴史全体が与える見通しの中で考察している。旧約に関しては「契約」という視点から神の啓示の過程とその文書化が、また新約に関してはさらにその「終末論的成就」としての把握とその文書化の証拠などが取り扱われている。

4 伝達の問題（R・レアード・ハリス）

この論文では伝達一般の原則が活用されながら人が神からの啓示を受けるという問題に限って伝達のこと追求される。まず現代の懐疑主義が退けられ、伝達の基礎として生ける神の實在と人が神の似像であることが主張される。伝達の方法の可能性が考究され聖書がそれにふさわしいものであることが指摘される。そして命題による伝達の不可欠なことが述べられ現代人の命題による啓示抜ききの神秘的な垂直的伝達の誤まりをつく。

5 啓示についての現代の諸見解（ジェームズ・I・バックナー）

まず啓示をめぐる現代の論争前の歴史的事情が素描され、宗教改革の立場に主観主義が侵入して自由主義神学となり、続く新正統主義神学の性格も結局は主観主義に引き下げられる傾向をもち、今や現代の際限ない懐疑的状況からの唯一の脱出の道は歴史的なキリスト者の聖書の教理に戻る以外にないことが紙面の少なさの割にかなりきめこまかく述べられている。ちょっとしたつき加減の所もあるが、全体的に言つて説得力があると感じた。

6 聖書の靈感に対する聖書の証言（アラン・M・スティブス）

聖書の靈感の問題においてももつとも基本的かつ中心的な聖書の靈感に対する「聖書自体の証言」の考察が行なわれている。まず靈感の意味がはっきりと輪郭づけられ、自己証言の妥当性が論ぜられ、聖書の自証が検討される。起こりうる疑問点を考慮しながら明快な論理、解明をもつて論述が進められている。確かに現代の諸問題に答える弁証上のよい前提作業が行なわれている。

7 旧約聖書の靈感（マルチン・H・ウィードストラ）

この論文はこんにちの聖書学の現況のなかで（その解釈学の問題—基本にある科学的方法論に注意しながら）もう一度「新約聖書の靈感」の問題を問い直し、聖書自体のまた正統的な立場の靈感の教理を再主張している。まず福音主義的学者たちが伝統的に理解してきた靈感の概念を明らかにし、次に旧約研究の現況の中でその靈感の検討をし、聖書自体の証言を探り、聖書

に調和し、支持を受けていて靈感の再主張をしている。

8 新約聖書の靈感(クラーク・H・ピノック)

一読してじつに力強い堂々たる正攻法の弁証論的論文であると思った。現代神学の矛盾の的確な指摘を啓示自体のより大きな文脈の中で靈感の主張が明快に行なわれている。現代の問題への把握が届いており、批判力が際立っているように感じた。

問題の状況、聖書と救いの歴史、新約聖書における權威の様式、新約聖書の自己証言、新約聖書の人間性、歴史的叙述、偽書、文化によって条件づけられた真理といった項目で進められている。

9 主イエスによる聖書の使用(ピエール・ch・マルセル)

この論題は目新しいものではない。古くから注目されたものであり、重視されたものである。しかしある意味で知られすぎて(一応はのことであるが)看過されやすく、ついその前を通りすぎてしまいがち。しかし論者は敬虔と感動と情熱をもってこの研究に従事している。読むうちに「主イエスによる聖書の使用。それは何という壮大な考察の主題であろうか。」と書き始めた論者の気持ちが伝わってき、共感を覚える。聖句導入のための定型句、聖書を全体的に用いること、キリストにおける成就、試練や誘惑における聖書の使用に分けて考察が行なわれている。

10 聖霊と聖書(J・セオドル・ミューラー)

いうまでもなくこの論題の健全な把握は非常に重要である。

まず聖霊が聖書を成立させた方であることが述べられる。続いてまた聖書を解き明かす方でもあることが説かれる。これに関連して神のことはと聖霊の照明の一体的な働きが強調される。さらに完全靈感の否定がこのみことばとの一体的な聖書の働きを危険に陥れることが指摘され、聖書からの聖霊の分離について詳論され、現代神学がこの傾向を帯びている点が批判される。

11 靈感についての教会の教理(ジェフリ・W・プロミリー)

個人的な関心、感覚、理解などが影響するであろうが、ともかく私にとっては論集中の圧巻と受け取れた。聖書の靈感の自己証明という規準で見事に教会の靈感の歴史を批判し今後の見通しを力強く示している。靈感に関する教理通史ともいえるべき論文である。初代教会を脅かした異見、教父時代、中世の教会、宗教改革、宗教改革後の時期、十八世紀合理主義と分けて論述される。そして結論に入って言われる。正統主義がたゆむことなく学識の限りを尽しているにもかかわらず、全く弱々しく無力で近代、現代と猛威を奮っている人間中心の傾向をなげ拒むことができないのか、と問い、「聖書の歴史的眞実性に対する攻撃が破壊的であったのは、正に正統主義が聖霊の証言に十分な信頼を置かなくなっていて、無謬であるから靈感されているという考え方によって、靈感と無謬との関係を逆転させる、合理的支持を求めなければならなくなっていたからである。」(二九五ページ)と喝破している。

12 現代の靈感論(R・A・フレイソン)

現代に生きるものとして直ちに関心を喚起させられる論題であることは言うまでもない。現代神学の前提(人間の経験と啓蒙の權威をもって聖書の權威に代える)構成(シュライエルマッハーからカール・バルトまで)行方(宗教的不可知論また神秘主義)がしっかりと視野に収められている。論述は大きく二つに分けられ、靈感の意味において、伝統的な靈感の教理に反対する人々の論議の多くが誤解時には虚報に基づいていること、またしばしば啓示と靈感、靈感と照明が混同されていることが指摘され、積極的に伝統的な見解が明らかにされる。次に現代に見られる幾つかの対立において、聖書と神の啓示、啓示―出会いか伝達か、神のことばと聖書の本文が扱われる。

13 旧約聖書正典(エドワード・J・ヤング)

靈感論と正典論とは不可分離の関係にある。論者は「一つの書の正典性を決めるのは、その書が神より靈感されたという事実である。」とその関係について述べる。さらに「幾つの書が靈感されたのか」と問い「この点でイエス・キリストの証言が決定的である。」と述べる。このようにして順次に正典の意味、正典の受容、正典成立に関する諸説、正典の区分と範囲などを扱っている。

14 新約聖書正典(ヘルマン・リダボス)

まず正典の研究は二つの観点から行なうことができる。すなわち正典成立の歴史と正典受容の根拠である。ここから始めて

正典についての歴史上の諸見解、新約聖書の原理(正典の基盤が救済史それ自体にあることに注目し、「使徒」「証人」「言伝え」などの概念の研究を用いてこれを明らかにする)新約聖書の正典概念、初期の教会における正典の受容と論述している。かなり綿密な論述で勝れた論文の一つである、と思う。

15 旧約聖書批評学の逆転(Nic・H・リダボス)

16 新約聖書批評学の逆転(メル・C・テニー)

近代聖書批評学の起こりと進展と近時とみに現われている逆転現象が考察され、批評学の位置づけがされている。そして前者では「過去においてと同じように、正統派の旧約学者は旧約聖書批評学によって、またこの分野での最近の逆流によってもその道を指図されるようなことなく自分の道を前進して行くべきである。」と奨められている。

17 聖書の統一性(フランク・E・ゲーベライン)

18 証拠としての預言と奇蹟(バーナード・ラム)

どちらも古くからの論題であるが、前者は聖書の統一の原理はキリストであるとの強調を中心に、後者は弁証論の構造が本来聖書に備わったものであるとの洞察から、現代にも鮮烈な印象を与えうる有力な論述を進めている。

19 聖書解釈の諸原則(アーネスト・F・ケヴァン)

20 聖書の現代における「適合性」(ジョン・W・モントゴメリー)

(紙面の都合で論題・論述者名の紹介にとどめる。)

(巣鴨聖泉キリスト教会牧師)

『牧会の神学』

一九七五年 聖文舎

尾山 令 仁

日本の教会は頭でっかちであるという評がかなり一般的であるのは、日本人の国民性にもよることであろうが、ドイツ観念論の影響によることもまた大であると思われる。したがって、わが国においては、教会があまりふるわないのが現実である。それはまた、神学における実践神学の弱体という現実にも現われていて、実践神学が神学におけるクイーンだと言われる今日でも、神学校にすらその道の専門の神学者はあまり見当たらない現状である。

それは、今日なお十九世紀にシュライエルマッハーによって名づけられた「実践神学」という部門としての理解がそのまま踏襲されているからではあるまいか。スワード・ヒルトナーは、この本の中でまずそのことを指摘している。シュライエルマッハーによると、それは「教会を維持し完成させる方法」にすぎず、つまり純粹に論理的な神学の分科、たとえば聖書学とか組織神学とか歴史神学などで得られた知識の応用にすぎない

ものであった。このように神学知識の主要な体系を、聖書神学・組織神学・歴史神学・実践神学の四つの部門として考える考え方についての大きな欠陥は、いわゆる実践神学を、あたかも神学の他の部門と同系のものとして取り扱おうとしているところにあると言う。つまり、論理中心の体系のみが神学であるという前提に立っていて、行動中心の領域における体系を認めようとしないうちに、ヒルトナーは、その点に着目し、ほかのだれも手をつけようとしなかった神学体系の整理整頓ということをはじめたのである。彼によれば、このことの確立なしには、牧会の神学は、神学として成立しないのである。その点において、ヒルトナーの果たした業績は画期的なものであったと言える。したがって、本書においても、著者は、その第一部において、「牧会の神学」の「神学体系」における位置づけを明確にしており、そのためにかなりのページをさいている。

著者は、「神学体系」を「論理中心のもの」と、「行動中心のもの」とに分け、前者に「聖書神学」、「教義学」、「歴史神学」、「倫理学」、「心理学的神学」、「審美的神学」、「比較宗教学」などを置き、後者に「牧会の神学」と「教育の神学」、「伝道の神学」、および「教会の神学」をおいている。後者が従来のいわゆる「実践神学」に当るものであるが、実践神学という発想法を拒けた著者は、これを行動中心領域における神学分科と呼び、「視座」(パースペクティブ)によって、これを三つに分

け、体系化している。まず「シェパーディング」という視座によって「牧会の神学」の成立をはかり、次に「伝達」(コミュニケーション)という視座によって、「教育の神学」、「伝道の神学」の成立をはかり、最後に「組織化」(オーガナイジング)という視座によって、「教会の神学」の成立をはかっている。

「牧会の神学」は、「シェパーディング」という視座から「癒すこと」、「支持すること」、「導くこと」をその内容とし、「教育の神学」、「伝道の神学」は、「伝達」という視座から「学習すること」、「実践すること」、「礼拝を行なうこと」をその内容とし、また「教会の神学」は、「組織化」という視座から、「養育すること」、「保護すること」、「関係づけること」をその内容とするのである。論理中心の神学分科と行動中心の神学分科とは、対等の関係にあつて、神学体系を成立させているのである。

著者は、この本の最後の二章において、「伝達」や「組織化」という視座に立つ考え方についても言及しているが、それは「牧会の神学」の一部としてではなく、同系の神学分科についての言及であつてこの本では「シェパーディング」の視座から見た「牧会の神学」の内容について述べている。まず「シェパーディング」についての伝統的な三分法の観念である「訓練」(ディシプリン)と「慰め」(カンフォート)と「薰陶」(エディフィケーション)をしりぞけたのち、「癒し」(ヒーリング)と「支持」(サステイニング)と「導き」(ガイディング)について

述べている。ここで「癒し」という場合、それは「損傷された機能的健全性を方向と時間において回復すること」(一一三ページ)であると言ひ、肉体と対立した魂(ソウル)だけの癒しではなく、この両者を含めた全人的な癒し、つまり「霊の癒し」でなければならぬと主張している(一二四ページ)。

次に、「支持」(サステイニング)について説明している。それは、「癒し」が不可能な時、少なくとも現時点では不可能な時に、その人のかたわらに立って、その人の気持を受け入れ、「力づけ」(エンハートン)をしてあげることの意味するものである。しかしそれは必ずしも、ことばや行為による「力づけ」なのではなく、相手に傾聴し、相手を受け入れることでなければならぬ(一五三ページ)。

三番目に、「導き」(ガイディング)について説明している。これは決して、ふつうの意味での強制的なものや説得的なものや解得的なものや選択を限定するものではなく、むしろ啓発的なものである(一九九—二〇二ページ)。

この「シェパーディング」における三つの働きを、あのサマリヤ人の譬の出来事によって説明すると、次のようになる。被害者が傷ついて、道に倒れているのを見たサマリヤ人が、その人は助けを必要として感じ、傷に手当てをしてやるのは、「癒し」なのである。そして彼を受け入れてやる行為が「支持」であり、宿屋まで連れて行ってあげるのが「導き」なのである(五三ページ)。

この本は、「牧会神学への序説」(Preface to Pastoral Theology)という標題がつけられているとおり、牧会神学についての単なる手引き書ではなく、彼の牧会神学についての考え方を表明した意欲的な論文ともいべきものである。それにもかかわらず、この本の中で事例として取り上げられているものは、ほとんどすべて十九世紀のニューヨークのブルックリンの長老教会牧師イカボッド・スペンサーの「ある牧師のスケッチ」からであるのはどうしてなのであろうか。もちろん著者は、スペンサーのやり方を一方では高く評価しながら、他方では自分の評価に従って、批判している。しかしながら、スペンサーの対話によるシェパード・ディンクの働きは、きわめて感銘的であり、多くの示唆を与えられる。

この本は、ヒルトナーの「牧会神学論」であるとすでに述べたが、彼は「牧会の神学」を神学分科として樹立するに当り、「視座」(バースペクティヴ)という概念を導入することによって、その思考を進めている。これは自然科学における「相対性理論」、また社会学や心理学における「場の理論」に負うているように思われる(三二一ページ)。彼がこのような「牧会の神学」樹立を使命としたことについては、アメリカにおける臨床研究の進展がその背景にあったことを見落すことができない。彼は次のように言っている。「今世紀において新しい牧会神学のための土壌を準備した人は、誰にもましてアントン・T・ボイセンである。彼は教職のための臨床訓練の創始者の一

人であるのみならず、約四分の一世紀前に、ある様式の宗教的経験とある様式の精神的混乱との経路の間に、類似があるという主張を掲げたのであった。人生きた人間の記録を研究することは、たとえそれが深い混乱に陥っている人々であるとしても、それによって単に心理学や精神医学を学んでいるのではなく、神学をも学んでいるのであると彼は提示した。……ボイセン自身は組織的牧会神学を作り出すことに関心を持たなかった。しかし本書の著者である私の組織的構造の基本的端緒は、ボイセンから出ているのである」(六〇ページ)。ボイセンのかかわり合いは、ヒルトナーがシカゴ大学神学部で学生時代、彼の臨床牧会の指導を受けた時に始まる。

ちなみに、著者はシカゴ大学神学部を振り出しに、エル大学神学部、ニューヨークのユニオン神学校で教え、現在はブリントン大学神学部で牧会神学を教えている。しかし単に学者としてのみならず、WCC奉仕部総幹事をしたりして、実践家としても活躍し、ことにPastoral Psychologyという専門雑誌に主要論文をしばしば執筆して、自分の理論を教会の現実の中で、実際に展開することに努めてきている。さきに同じ著者の「牧会カウンセリング」(日基教団出版局)が同じ訳者によって訳され、出版されている。

著者の啓示観は、ウイリアム・テンブルの定義をそのまま踏襲していて、「出来事と認識との一致」であると言っていること(二一ページ)、およびスペンサーを「応高く評価しながら

も、聖書の権威に関するスペンサーの立場への批判をしているところに(一〇三ページ)、著者の神学的立場が出ているが、全体としては牧会神学へのよき入門書であると言いうことができればよい。

神学的には、評者は著者とその立場を同じくするものでないことを付記しておく。したがって、牧会神学の神学体系における新しい位置づけの試みに関しては一応共鳴しつつも、完全に同意するものではない。とくに牧会神学の内容については「癒し」と「支持」と「導き」によってすべてをカバーできるという考えには疑問を抱かざるをえない。これは「牧会」に関する基本的考え方の相違に基づくものであろうと思う。この本の原著は一九五八年に出されたものであるが、「牧会学」に関してほとんど著作らしいものがないわが国にあっては、必ずしも古すぎる本であると言いうことはできない。私はこの本を福音主義の立場に立つ日本の牧師、神学者がぜひ一読することをお勧めしたい。

(高田馬場教会牧師、東京神学校校長)

【論 評】

新約学関係の文獻

一九七四年以降出版の

村 瀬 俊 夫

まず日本語のものから紹介する。第一に注解書であるが、一昨年までに新約聖書全体の注解シリーズを完成させた、「バレークレイ聖書注解シリーズ」全十七巻(ヨルダン社)、「聖書講解全書」(The Layman's Bible Commentary)の邦訳、そのうち新約は第16巻から第25巻までの全十巻。日基教団出版局)、「新聖書注解」新約全三巻(いのちのことば社)のあとを受けて、無教会系の学者と訳者を総動員して「NTD新約聖書注解」(全十一巻)の刊行が、NTD新約聖書刊行会の手で開始された。最初にエドワルト・ローゼ「ヨハネの黙示録」(高橋三郎、三浦永光訳)、以後、Hid・ウェントラント「コリント人への手紙」(塩沢饒訳、泉治典訳)、パウロ・アルトハウス「ローマ人への手紙」(杉山好訳)、ヨハネス・シュナイダー「公同書簡」(安達忠夫、大友陽子、斉藤顕、杉山好、高橋三郎、松本武三訳)、『デモテへの手紙』、テトスへの手紙、ヘブライ人への手紙」(泉治典、大友陽子、木幡藤子、関根正雄、高橋三郎訳)

の順で刊行されている。この翻訳刊行のために長い準備があっただけに、たいへん良心的な仕事ぶりである。一般信徒を対象にしながらもドイツ流の学問的深さを十分に感じさせる、実に読みごたえのある注解で、注解の随所に挿入された付説がとても参考になる。新教出版社からは三冊の注解書が出版された。第一は、佐竹明『ガラテア人への手紙』で、先に同じ「現代新約注解全書」の一卷として出した『ピリピ人への手紙』に続く本格的な注解で、六百頁を越える大作である。横組の本文で諸家の説や見解はすべて脚注に紹介され、本文には著者自身の独創的見解が述べられている。第二は、カルヴァン「新約聖書註解」(全十四巻)の十一冊目として久しぶりに刊行をみた『ヘブル・ヤコブ書』(久米あつみ訳)である。第三は、山谷省吾『エペソ・ピリピ・コロサイ・ピレモン』で、著者の「パウロ書簡の新訳と解釈」がこれで完成した。最も新しいのは、日基督教団出版局から出た小野一郎『ヨハネによる福音書』で、「信仰論からの講解」と副題がつけられているように、ヨハネ福音書を信仰の側面から解明したものである。

注解書ではないが、山本書店から先に『新約聖書ギリシヤ語辞典』を刊行した岩隈直氏の「希和对訳脚註つき新約聖書」(全十二巻)が、既刊の『マルコ福音書』『ローマ人への手紙』『ヘブライ人への手紙』に続いて『パウロ獄中書簡』を出している。ギリシヤ語本文に対して苦心の日本語訳を並べ、脚注を付して、ギリシヤ語原文から聖書を学ぼうとする者に実地的なところのかかりで敘述している。もう一つ注目される出版は、新約時代の第一級の史料であるヨセフスの『ユダヤ戦記』の邦訳が、全三冊で山本書店から刊行されることになり(新見宏記)、その上巻がこのほどお目見得したことである。さらに山本書店から、秀村欣二、蛭沼寿雄ほか訳編で『原典新約時代史』の刊行が予定されている。これには新約時代の重要な関連史料を、ギリシヤ、ローマ、エジプト、ユダヤ等からすべて集め、系統的に編集して詳細な注と解説が付されており、原典史料に基づく新約時代史である。

昨年、イエスに関するセンセーショナルな題名の本が二冊、訳出された。第一は、新教出版社から出たM・ヘンゲル『イエスは革命家であったか』(川島貞雄、山口雅弘訳)である。これは「イエスは革命家であったか」と「暴力と非暴力」という二篇の論文からなり、それぞれ福音書研究に新しい光を投じている。ヘンゲルによると、「イエスの道」はあらゆる革命的状况の中で非暴力の道を示し、敵を愛することによって暴力を克服する新しい革命をもたらすものであった。第二は、ヨルダン社から出たW・E・フィッツス『イエスは結婚していたか』(石川重俊訳)である。この書は「キリスト教伝統における性の歪み」(副題)を是正しようとする真面目な意図から執筆されている。もしイエスの結婚生活が論証されるなら、キリスト教会における不当な性蔑視や独身主義は大きな支柱を失うことになる。著者の努力にもかかわらず、イエスが結婚を経験されたこと

助けを提供している。なお『新約聖書ギリシヤ語辞典』も昨年、全面的に改訂・増補した第五版を出している。ヨルダン社から刊行された竹森満佐一『わが主よ、わが神よ』IとIIは、降誕から復活にいたる主イエスの生涯を題材にした説教集である。Iは待望・誕生からガラリヤ伝道の時期を題材にした十四篇の説教、IIはピリポ・カイザリヤの事件前後から受難・復活にいたる出来事を題材にした十二篇の説教を収めている。

昨年の秋、岩波新書の一冊として出された荒井献『イエスとその時代』は、イエスに対する歴史的接近を試みた労作で、イエスに関する伝承の最古層から十字架刑に極まるイエスの振舞を描こうする。その結果、イエスは常に民衆の側に立ち、権力に抗し、人間の自由のために振舞った人間として描かれる。その方法は、伝承とそれを担う社会層との関係を探る文学社会学によって行っている。今年になって、ヨルダン社からフランスの代表的な新約学者E・トロクメ『ナザレのイエス——その生涯の諸証言から』(小林恵一、尾崎正明訳)が邦訳出版された。トロクメも伝承を担う社会層に注目し、各社会層ごとのイエス像を並列的に描き出しながら、イエスの全体像を見ようとする。それまでのイエス研究に新しい道を開く意欲的な作と評されている。

イエスの時代史に関する関心の高まりの中で、H・コンツェルマンはか十五人のドイツの学者による『イエスの時代』(佐藤研訳、荒井献序文)が教文館から訳出された。原始キリスト教史上における十六の事項を選び、それぞれ専門学者が世界史

という仮説には無理がある。しかし、イエスは禁欲主義者ではなく、弟子たちにも結婚の断念を要求されなかったことを明らかにしている点は評価される。

新約神学関係では、まず新教出版社から出たH・コンツェルマンの大作『新約聖書神学概説』(田川建三、小河陽訳)をあげなければならない。著者は、新約聖書の伝承史的・編集史的研究法の先駆者として成し遂げた成果を十分に生かし、ブルトマンの『新約聖書神学』を批判しつつ、神学生のための教科書としてこれを書いた。そのため各章、各テーマごとに最近の学界の問題や研究状況が簡潔に紹介されている。共観福音書の神学を認めなかったブルトマンに対して、コンツェルマンは編集史的立場から共観福音書の各記者がそれぞれの神学的構想を代表しているとし、マルコ、マタイ、ルカの各神学を取り扱っている。同じ新教出版社から、昨年から今年にかけて、現代ドイツの代表的神学者によるイエスの死と復活をめぐる共同研究の三部作、クレック、ビツァーほか『イエスの十字架の意味』(南吉衛訳)、ケーゼマン、コンツェルマンほか『イエスの死の意味』(安積鋭二訳)、ヴァイルケンス、デリンクほか『イエスの復活の意味』(村上伸訳)が刊行された。どれも四篇ないし五篇の論文を収めているが、それらは現代の教会が直面する説教の危機に対処して、宣教の中心主題に肉薄する学問的良心のあふれた力作である。『イエスの復活の意味』の巻頭に、W・マルクセンの「史のおよび神学的問題としてのイエスの復活」が収めら

れているが、証人たちの目撃体験の反省が弟子たちをイエスは復活したという解釈へ導いたとする彼の結論は、多くの論議を呼んでいる。

日基教団出版局からは昨年、二冊の注目すべき書が訳出された。第一は、J・エレミアス『イエスの聖餐のことば』(田辺明子訳)である。著者の史的イエス探究への情熱は、この書においてもイエスの生のことば(ipsissima vox)の回復を意図している。なお本書については、本号に村上久氏が書評されることになっているので、参照されたい。第二は、H・D・ウェントラント『新約聖書の倫理』(川島貞雄訳)である。著者はNTDの『コリント人への手紙』を執筆している新約学者であるが、キリスト教社会倫理にも関心が深く、新約聖書の倫理を扱う最適の人である。原書はNTD補遺第四巻として出版されたものである。救いの告知と要求とは不可分な統一をなし、直説法と命令法とが密接に結びついている点から、新約聖書の神学と倫理の基本構造を明らかにしていることが注目される。

最後に、昨年講談社から出た『聖書の世界』の別巻3と4(新約1と2)を紹介したい。前者は「新約聖書外典」、後者は「使徒教父文書」の邦訳である。これらの書が分かりやすい日本語で読めるようになったのは、新約聖書の研究を側面から助けるもので、日本の聖書学がそれだけ深みを増してきたことを意味するものではないかと思う。それにしても、日本の福音派からの目ぼしい出版がなかったことは、紹介者としてさびしい

限りである。

それで次に紹介する英語関係の文献は、主として福音派のものに限りた。まず注釋書では、The New International Commentary of the Gospel of Mark (Erdmans)を最初にあげたい。これは六百頁を越える大作で、編集史的方法なども考慮し、福音派の立場から学的良心をもって取り組んだ最新の注釋書である。他にシリーズものの注釋としては、The New Century Bibleの1冊として出たRalph P. Martin, *Colossians and Philemon* (Attie) The Tyndale New Testament Commentariesの最終巻として出たLeon Morris, *The Gospel of Luke* (Erdmans) The Harper's New Testament Commentariesの1冊として出たC. K. Barrett, *A Commentary on the Second Epistle to the Corinthians* (Harper & Row)がある。Markus Barth, *Ephesians* (Doubleday)は、伝統的なパウロ著作説を擁護し、歴史的・文法的釈義と神学的洞察とが一つになっている、すぐれた注釋である。D. M. Lloyd-Jones, *Romans: The Law: Its Function and Limits* (Zondervan)は、ローマ七・一八・四から、律法の役割と限界を取り扱った、これもすぐれた講解である。

史的イエスとキリスト教の起源をめぐって多くの書物が出されている。C. Leslie Milton, *Jesus: The Fact Behind the Faith* (Erdmans)は、信徒を対象に、健全な歴史的・批評的

原則に基づいて歴史的懐疑主義に答えようとし、福音書が歴史的に信頼しうるものである根拠を示している。M. de Jonge, *Jesus: Inspiring and Disturbing* (Abingdon)は現代人に理解されるように人であり神であるイエスの人格を解明しようとしているが、著者(オランダ人)の見解にinspireされるよりもdisturbされる人が多いであろう。Geza Vermes, *Jesus the Jew* (Macmillan)は、ユダヤ教の専門家の作で、イエスの物語を当時の歴史的環境、すなわち、一世紀のパレスチナのユダヤ教のうちに位置づけようとしている。Bruce Vawter, *This Man Jesus* (Doubleday)は、批評的歴史家として知られた篤信のカトリック系学者の作で、その神話や伝説のカテゴリーの使用に異論はあっても、聖書の記述との信仰的な取り組みの真剣さには感服させられる。John Dominic Crossan, *In Parables: The Challenge of the Historical Jesus* (Harper & Row)は、現代の文獻批評の成果と聖書神学の成果と統合しようとしている。著者の所説によると、イエスの宣教は、「この世に挑戦し、その自己満足を絶えず打ち破るお方としての神の永続的臨在」という意味で、永続的終末論(permanent eschatology)と呼ばれるものである。F. F. Bruce, *Jesus and Christian Origins Outside of the New Testament* (Erdmans)は、ヨセフス、ラビの伝承、外典福音書、コーラ

ン、さらに考古学的証拠などに照らして、イエスと初代教会について論じている。短いスペースに多くの情報を収録している

のはさすがである。Gerard S. Sloyan, *Jesus on Trial* (Fortress)は、イエスを処刑した責任はユダヤ人よりもローマ側にあると結論している。Peter F. Ellis, *Matthew: His Mind and His Message* (Liturgical)は、牧師や神学生向けに、最近の解釈を概観し、マタイの文学的構成と神学的意図を探ろうとしている。

パウロ研究の面で二、三点を紹介する。F. F. Bruce, *Paul and Jesus* (Baker)は、パウロのイエスに対する関係を論じた小冊であるが、両者の親密な神学的結びつきを論証している。A. T. Hanson, *Studies in Paul's Technique and Theology* (Erdmans)は、パウロの神学的方法とその旧約聖書の解釈を明らかにしている論文集である。Gordon P. Wiles, *Paul's Intercessory Prayers* (Cambridge)は、著者がハーヴァード大学に提出した博士論文が基になっているが、パウロの実存の核心に迫る研究である。

新約神学に関しては、現代アメリカの福音派における第一級の新約学者であるGeorge Eldon Laddの大作 *A Theology of the New Testament* (Erdmans)が出された。これは著者の三十年にわたる神学教育と研究の成果であり、豊富に文献を参照し、的確に所論が展開されている。まさに福音派を代表する「新約神学」であるが、本号に宮村武夫氏の書評があるので参照されたい。Chester K. Lehman, *Biblical Theology: New Testament* (Herald Press)は、G・ヴォスの線に沿う

ものであるが、学的深さにおいて前者にはるかに及ばない。
G. W. Bromley によるキッテルの新約神学辞典の英訳 *Theological Dictionary of the New Testament* (Eerdman's) が、昨年初めに最後の第九巻を出して完成した。これはまさに記念碑的業績として特筆されてよい。

最後に、二、三点の記念論文集を紹介する。R. N. Longenecker and M. C. Tenny (ed.), *New Dimensions in New Testament Study* (Zondervan) は、今日の福音派を代表する新約学者二十四人の論文が収録されている。R. Ranks (ed.), *Reconciliation and Hope* (Eerdman's) は、Leon Morris の献呈論文集で、十九の論文の中にはドイツの G. ボルンカムが含まれている。G. F. Hawthorne (ed.), *Current Issues in Biblical and Patristic Interpretation* (Eerdman's) は、Merill C. Tenny の祝賀論文集で、二十八人が寄稿している。

(聖契神学校講師、蓮沼キリスト教会牧師)

最近の宗教哲学界の動向

ハーバート・H・スコグランド

宗教哲学及びそれが関連する分野は、教職者の学びの重要な部分である。宗教理解の探求は、教職者がたえず努力していな

くてはならないものである。教職者たるものは、此の学問の分野における基礎知識くらいはみな持っているべきであると思われる。この非常に難かしい宗教理解への手ほどきを受けることは、教職者をしてこの問題についての理解を深めさせるとともに、自然と人間の運命に関する最近の思潮に対しても目を開かしめることになるであろう。また同時に、それは、現代の社会が自問しているところの問題の根本の理解を知る助けともなるであろう。かかる学びは、教職者が聖書からの回答を用意しなければならぬ、さまざまな問題分野に対して、基本的な示唆を与えてくれるものである故に、説教とその準備のための聖書研究に対して間接的な助けとなるのである。この面の学びにはさまざまな分野がある。例えば、宗教史、宗教哲学、宗教社会学、宗教心理学など。又、解説的なもの、比較的なもの、評論的なものなどである。このようなさまざまな分野の基礎的な学びをすることによって、教職者は、多くの著書を通して、世界と人間性に対するそれぞれの著者たちの根本的な理念を見抜くことができるようになるであろう。

学者の中には、宗教の研究に於て、自分を中立の立場に置くとうとする人々があるが、(筆者は、かかる考えは不可能と信じている) 宗教研究というものは、不可避的に著者をして、著者が宗教に関する彼の考えを述べる時に、著者自身の人間観を露呈させるものである。このように、教役者が、此の分野の著書を読むとき上述の学びは著者たちを神学の面から正しい批評を

させてくれるとともに、聖書が教える人間理解と彼自身の宗教の一層明確な理解へと導いていくことになるのである。

以下のものは、主として英語で著わされた少々古いものと、ごく最近のものであるが、教役者の方々にとり有益であろうと思われる。

宗教言語の性質に関しては、長い間論争が続けられて来ており、これはなかなかの難問である。この問題に関する最近の著書は、Ian G. Barbour *Myths, Models and Paradigms: The Comparative Study of Science and Religion* (Haper and Row, 1974) である。

著者は、宗教言語と科学言語の基本的な仮定は、両者ともに立証されないものに立脚しており、それ故に、科学言語は事実であり、宗教言語は意味をなさないという理論は正しくないということを強調しようとしている。

宗教信仰というものは、科学の観察におけると同じように具体的にみえないかも知れないが、物理的現象の科学的解釈と同様のやり方でもって、経験的な事象の宗教的な解釈は信頼しうる知識を与えるものである。従ってこれを意味をなさないものとなすことはできないのである。模型と模範の使用は、物質界における知識を発展させるのに役立つと同程度に、宗教の研究においても有用であり、著者は、*Process Theology* は、宗教の詳細な理解のための模型であると示唆している。

The Science of Religion and the Sociology of Knowledge

age: *Some Methodological Questions*, by Ninan Smart (Princeton, 1973)

此の著書で、著者は、それ自身は宗教についての積極的な仮定に関わりあってもせず、また人間の宗教体験の背後にある客観的な現実に対して反対するでもないところの宗教分析というものを主張している。

宗教の研究は、宗教の間の教義の生きた関係を記述することを求めなくてはならないし、各々の宗教の内的自律性を認めなければならぬものである。このように宗教の研究の目的は、その宗教が一般的に客観的であるか非客観的であるかというようなことを問うことにあるのではなくて、それぞれ異なる文化の内において、数多い宗教がいかにそれぞれの有機的な生命を表現しているかを研究することである。

日本の宗教に関して最近の特に興味深い著書は、*Circle of Harmony* by Dale (Seibunsha, 1975) である。

これは立正佼成会の法座の研究である。著者は法座の性格の分析にあたって、*case study method* や *group dynamics* の概念を用いている。また、法座のあたたい、行き届いた会員たちの交わりを、日本の教会のしばしば冷たく、理知に走りすぎて高慢な姿勢に対比させている。この著書は、教役者が読んで興味をそえられるようないくつかの示唆を含んでいる。この中には、東京の小川赤十字病院の精神科の部長をしておられる赤星進博士による一章も加えられているが、その中で彼は、西

洋及び日本の宗教認識を心理学と神学の視点から比較しておられる。その観察の多くは大変興味深いものである。

一九七三年に東大出版会が出した宗教学辞典は、日本で最初の宗教研究の辞典である。これは包含する範囲が大変に広く、代表的な日本及び西洋の宗教学者たちの意見や理論を載せている。この宗教学辞典の出版は、日本の宗教の研究の分野にとって重要なステップであるとともに、これは研究のいろいろな面で広く活用されるであろうと思われる。そういうわけで教職者の方々は、この辞典に親しむことによって、宗教というものに關して更に広い理解を得ることができると思う。

M・エリアーデの理論に興味をお持ちの方には『The Quest, History and Meaning in Religion』が大変役立つであろう。これは彼の基本的な宗教理解に関するいくつかの編集であり、「人間の性は超自然的な存在によって顯示される例証のモデルを模倣すること。すなわち聖なるものとの対決を通じて意味深いものとなる」という彼のテーゼの敷衍である。聖なるものは、「存在、意味、真理の觀念と関連している」のであって、それは「必ずしも神、神々及び諸靈の信仰を含んでいる」と考える必要はないと彼はのべている。

少し古いものではあるが、教役者にとって役に立つものといえは『The Church Between the Temple and Mosque』 by J.H. Bavinck である。この書は彼の没後出版されたが、これは多くの宗教と実践的なかわりを持ち、*christelijke* 宗教について嚴

しい研究をした彼の生前を反映している。このオランダ改革派の学者は諸宗教の問題を注意深く研究したのであるが、同時に彼は次のように明瞭にのべている。「イエス・キリストにおいてのみ……我々は(神の)声をきき、彼の姿を見るのである」。福音派の他の著名な、ここ数ヶ月間に出版された書物は、『Christianity Today, March 14, 1975』に詳しい。以下はその書評である。

『Philosophy of Religion』 by Norman Geister (Zondervan) は宗教体験、神知識、実在の実証、宗教言語、悪の問題等の基本的な神学問題に関するテキストブックである。これは非常に率直に述べられており、わかり易く貴重である。

『Contemporary Philosophy and Religions Thought』 by Malcom L. Diamond (McGraw-Hill) は Geister よりも詳細にわたっており、R・オットー、M・ブバー、W・ジェイムズ、P・ティリッヒ、S・キルキエゴール、R・ブルトマンなどの学者たちを取り扱っている。

A Philosophical Approach to Religion by Donald Hudson (Burners and Noble) は宗教的信念の構造の論理性とその客観性を調べ、これを支持している。彼は、セキユラーな神学者といわれているボン・ハッファー、ブレイスワイト、ブアン・ビュレン、ティリッヒ、コックスなどの試みを取りあげ、自分の試みに挑戦するものとして不十分であるとしている。

Religion and Philosophy by Frederick C. Copleston S. J.

(Barnes and Noble) は「理性的な省察の活動によって絶対的なものへ至る道」としての訓練について説明し、これを弁護している。この書は大変有益である。

『Philosophy of Religion: Contemporary Perspectives』 edited by Nibert O. Schedler (Macmillan)。これは選集であるが、無神論者及び宗教的実存主義者を含む哲学と宗教の境界線上に位置する、最近の著名な思想家の代表的な思想を集めたものである。

Readings in the Philosophy of Religion edited by Baruch A. Brody (Prentice-Hall) は少々大冊のものであるが、更に広い歴史的視野をもって記されており、アウグスチヌスまでさかのぼって、歴史に繰り返し現われてくる宗教哲学のいくつかの問題に關して、伝統的なキリスト教会が取り組んできた方法を説明している。

The Wonder of Being by Charles H. Malik (Word) は聖書の信仰の理を通したよう護の宇宙論的な議論の新鮮な抽出をしている。

Myth, History and Faith: The Remythologizing of Christianity by Morton T. Kelsey (Paulist) は C. S. ルイスの精神をもって、一つの野望的な提案がなされている。この中で彼は神話の機能と価値について説明している。彼独得の考え方からキリスト教をも一つの神話であると見、そして、キリスト教を真実であるとしている。

Christian Empiricism, edited by Jerry H. Gill, and Austine Farrer, Reflective Faith, edited by Charles C. Conti (both Eerdmans)

著名なクリスチャン哲学者によるこれら二つの論集は、何でも分解してしまおうとする言語分析の懐疑論に対して、キリスト教教理を確証することを目的としている。ラムゼイは神学的論説の価値に関するいくつかの有益な考えを提供しており、フアーラーは神の実体についての確固たる議論を提出している。

The Understanding of Faith: Interpretation and Criticism by Edward Cornelis Florentius Alfons Schillebeeckx (Seabury)

古今の言語分析に關する議論をとりあつたものの中で、これは重要な新著である。著者はオランダ・ガソリックの思想家であり啓示の問題の研究に没頭している。この書はその翻訳である。この小冊ではあるが、堅実な著書は、一方では言語分析に対してなされる通例の結論をはっきりと拒否しながら、言語分析に対していくつかの肯定的な、洞察にあふれた評価をしている。

(日本キリストバプテスト連合宣教師団宣教師)

編集後記

本号も、執筆者の先生方の心からなる御協力を得て、みなさまのお手もとにお届けすることができました。

編集委員は五号と同じメンバーでしたが、今回は特に関西方面における福音主義神学会の活動が盛んになり、そちらからの執筆者が前号までに比して多くなりました。

このために関西西部会からの編集委員の春名純人氏は再度にわたって上京して下さり打ち合せの時を持ちました。同地区では生産的な研究会が多く持たれ、若手の先生方の内容ある研究が公にされているので、このような研究の成果をも本誌に紹介してはとの御意見をいただいております。

ただ物価の不安定な上昇期にありますので、本号では増ページがかなわず実現しませんでした。しかし、全体の内容の配列から、そのような考慮も可能であろうと思われれます。

次期編集委員に大いなる期待をもって後記とします。

(小林)

昭和五十年十月三十日発行 頒布価 八〇〇円

編集者

山口 昇
春名 純
小林 和夫

発行者

東京都東久留米市氷川台一ノ
八ノ一五 日本基督神学校内
日本福音主義神学会

印刷

いのちのことば社印刷部

発売 いのちのことば社